
妖精の尻尾

黒崎メグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精の尻尾

【Nコード】

N21870

【作者名】

黒崎メグ

【あらすじ】

You can get anything from socks to fairy's scales.

（靴下から妖精の鱗粉まで何でも揃います）

と不思議な看板を掲げた雑貨店。ひよんなことからその店で働くことになったお坊ちゃんのエドワードと掴みどころのない正体不明の店長、そして個性豊かな客達が織り成すちょっと不思議なお話。

零話 新人店員

風を冷たく感じ始めた季節、日が昇るのも随分遅くなってきた。

まだ夜が明けて数刻しか経っていないのに、それでも通りには職場に向かう人々の姿がある。エドワードはその波に吞まれそうになりながら人と自動車、そして馬車の行きかう大通りを抜けた。

自然と息が弾み、出掛けに家人に着せられた薄手のトレンチコートの下でじわりと汗が広がっている。

「意地なんて張らずに送ってもらうんだった」

エドワードはコートの前ボタンを外しながら呟いた。コートの下に着ているのは紺のベストに白いシャツ。一見して仕立ての良いものだとわかる。十九世紀末——二十世紀を迎えようというのにいまだ貴族社会の名残から階級が色濃く残る英国。この国で、エドワードは恵まれた家の生まれだった。まだ十三を越えたばかりのエドワードだったが、家では毎日自分よりも年上の使用人達に頭を下げられる立場なのだ。実際今日とて運転手を送迎を申し出ていたのだが彼はそれを断ったのである。

だってあんな店で働いているなんて知られるわけにいかないじゃないか、とエドワードは心の中でぼやいた。だが、愚痴ったところで契約を一方的に放棄することは彼のプライドが許さない。

契約——そう、それこそがエドワードが？あんな店？で働く理由であつた。もつといえはそのことを秘密にしなければならぬ理由でもあつた。エドワードが求めたものの対価を、彼の店の店長は、労働力とその秘匿に求めたのである。普段からお金さえあれば大概のものが手に入っていたエドワードは正直面食らつたのだが、働き始めて五日も経てばこの生活も悪くないと思ひ始めている自分に驚いた。

エドワードが？あんな店？と称したのは一種の雑貨屋だ。様々な客が入れ替わり立ち替わり訪れる。友人宅のガーデンパーティー以外、

特に家を出る機会がなかったエドワードにとって、何もかも初めての世界だった。いつも同じような顔ぶれと交わすホストと客の会話よりも、見ず知らずの客と交わす他愛もない会話が今は楽しい。エドワードが知らないことの多くを彼らが教えてくれた。

エドワードは足が速まるのを感じながら、未だ見逃しそうになる小さな路地を抜けた。すると目的地が見えてきた。赤茶色のレンガ造りの建物――。一階はガラス張りになっていて店の様子が窺えるようになっていた。だが、店内はまだ薄暗かった。エドワードはそれを気にせず、建物に足を向けた。

数段のステップの上にレンガの色に溶け合うような朱塗りのドアがあり、青銅製のプレートが掛かっている。プレートは裏返しになっているようで、そこには何も書かれていなかった。エドワードはステップを上るとそのプレートに手を掛けた。裏返しになっていたそれを表に向ける。

You can get anything from socks to fairy's scales.

（靴下から妖精の鱗粉まで何でも揃います）

少しずつ馴染みが湧いてきたそのフレーズは、Close、Openの札に代わりこの店の営業時間を現すものだ。表を向いていればOpen、裏ならCloseという具合に。

しかし、エドワードはこのプレートに書かれた言葉が真実であるかは知らない。

産業革命以前、この国は妖精文化と共に歩んで来た。この国の伝承には多くの妖精が登場し、彼らの存在を実際に目にしたものは居なくとも、多くの者は彼らの存在を身近に感じ、信じてきたのだ。

しかし、産業革命以後、科学や文化の発展と共に妖精達は忘れ去られ、今では彼らの存在を信じる者は少ない。

そんな中で尚、この店はこのような看板を出している。その意図するところがエドワードにはわからなかった。

だが――彼ならそれも叶えてしまっただろう、とエドワードは思うのだ。エドワードに対して、彼がそうしてくれたように。そして少し癪に障るが、自分が与えられる対価以上に彼には多くのモノをもらっているような気がする。

エドワードは掴みどころのない店長の顔を思い浮かべた。手の中では彼から預かった鍵が弄ばれている。まだほんの数日しか共に働いていない相手に大事な店の鍵を預けるような信頼もその一つ。

鍵を鍵穴に刺し回すとカチャリと金属音がしてドアが開く。薬草と油の混じったような独特の香りが鼻をついた。

壁に沿うように備え付けられた、エドワードの身長に優に二倍はある棚と、そこに並んだ色とりどりの商品が彼を迎える。中央に備え付けられた商談用の丸テーブルと、少し奥まった所に階段を背にして設置されたカウンターは年代物で、歴史を感じさせる深い色合いを醸し出していた。

今日も何かを求めて客がやってくる。忙しい一日が始まる。思いを巡らせながらエドワードはシンプルな黒いエプロンに袖を通す。店の明かりを付けると、ずらりと並ぶ商品に命が灯った気がして思わずくすりと笑ってしまった。

「さて、今日も一日頑張ろう」

腕まくりをしながらエドワードは呟いた。

零話 新人店員（後書き）

英語が合っているのか心配です。

主語がおかしい気がしたので、当初の英文より少々変更しましたが、間違ってたらご指摘下さい。

そしてこの話は短編形式で綴って行くつもりです。手始めに全ストーリーを通して登場する主人公のことをちょこつと導入がてら書かせていただきました。最後までお付き合い下さいましたら幸いです。気軽にメッセージも残してやって下さい。

一話 常連客【1】

雑貨屋・妖精の尻尾フェアリーテイルは一階が店舗、二階が居住スペースになっている。二階で物音はしないので珍しいことに店長はまだ起きていないようだった。今日は店の開店前にやって来たのに、とエドワードは不満に思ったが、初日から数日遅刻していた手前人の事は言えない。

ひとまず教えられている通り、商品の補充から始める事にした。エドワードはカウンター脇に置いてあったランプに火を付けた。倉庫は地下にある。店長曰く光を嫌う商品も多く取り扱っているからだそうだ。だから地下には電球は取り付けられていない。地下に降りるときはどうしてもこのランプが必要になった。

不便な事に大きな荷物を持つと帰りは手が塞がるため、荷物を置いた後ランプを取りに戻らなければならないのが玉に瑕きずであった。だが、エドワードは宝探しの洞窟のような地下倉庫が気に入っている。

そして、エドワードがランプと入れ替えて箱を抱えて店内に戻ってきたところで、カランカランとドアに取り付けられていたベルが鳴った。眩しさに目を細めながら目を向けるとそこに居たのは光を凝縮したような珍しい髪色をした偉丈夫だった。

年の頃は、三、四十といったところで、働き盛りの男性が持つのに相応しい均衡のとれた立派な体つきをしている。

「いらつしゃいませ」

型通りの挨拶をすると、男はカウンター前までやってきた。エドワードはひとまず箱を床に置いて、男を見上げた。近くで見ると随分大きい。見下ろされると妙な威圧感さえ感じる。エドワードがその威圧感に言葉を失っていると、男はその太い指でコインをカウンターに置き、「いつものを頼む」と唐突に言った。

「へ……？」

呪縛を解かれたように、エドワードは思わず目を瞬かせた。決して悪気があった訳ではない。そんなエドワードの様子に男は訝しそうに眉間に皺を寄せたが、それ以上言葉を発しなかった。

常連客——なのだろう。しかし彼の求める物が何なのか、エドワードは知らない。せめて常連客であるなら新米店員だということに気付いてくれてもいいのに、とエドワードは思った。だがまさかそれを口にするわけにもいかないのはいくら接客が浅いエドワードだって理解している。それより男の求める品を聞く方がよっぽど賢明だ。

内心の戸惑いを抑えてエドワードが口を開きかけた——
と、その時。

「ふああ」と気の抜けるような声が店内に響いた。
目の前の男性客ではなく、もちろんエドワードでもなかった。声の方を見遣るとエドワードの目にプラチナブロンドが飛び込んで来た。店長である。

女性と見紛うほど長いプラチナブロンドの髪を鬱陶しそうに掻き揚げて、大きな口を開けて欠伸をしている。着ている物は寝巻ではなかったが、白いシャツのボタンは申し訳程度に止められているだけで、胸元がちらちらと見えている。シャツの裾も動きに合わせてふわふわと舞っていた。

どう見ても寝起き。何ともだらしない。

ここ数日でエドワードが築き上げてきた店長像が音を立てて崩れていく。

この人は得体が知れないというよりは無頓着なだけなんだ、とエドワードは結論付けた。

だが、エドワードだけなら兎も角、こんな店長の姿をお客様もばつちり目にしているわけである。

「店長、お客さんの前になんて姿で出てくるんですか……」

うーん、と眠そうに眼を擦り、店長はエドワードを見た。

「ごめん、ごめん。ルーの声が聞こえたような気がしたもんだからルー？ 声ということは人の名だろうか、とエドワードは首を傾げた。その答えは案外すんなりともたらされる。

「アルヴィン……」

と、男は店長の名を呼んだ。

「ほら、やつぱり、ルーだ」

店長はその董色の瞳を男に向けた。そしてゆっくりとその目を細め、言葉を続けた。

「それにしても、今頃御出ましかい？」

本来ならそれは、寝坊してきた店長自身に向けられる言葉であるはずだとエドワードは思ったが、男に気にした様子はない。

「遅れるなら遅れるって伝えといってくれないと、いつものように早起して待っていたのに、全然来ないから二度寝しちゃったじゃないか」

「すまない。だがお前の事だ、伝えなくても察してくれると思っていたんだが」

「どういうこと？」

「秋も深まり、冬も近付いてくる頃だろう？」

冬——つまり、寒くてベッドから出難くなるということだろうか、とエドワードはここ数日の自分の事を思い出す。初日から数日遅刻してしまったのはそのせいでもあった。大方この男もベッドから出難くて寝過してしまったのだろう。

「ああ、そうか！ 道理でいつも通りの時間に起きても外が暗いはずだ。すっかり忘れていたよ、ルーがそうなると寝ぼすけだってこと」

「私は好きでそうしているわけじゃない。自然の摂理がそうさせているのだ」

男は至極当たり前のことのように言ったが、内容は子供の言い訳と変わらない。エドワードは、成人した男性にも関わらず少し可愛らしいとさえ思えた。

店長も慣れた様子で「あー、はいはい」と受け流す。

「エドワード、すまないけど倉庫の二番の棚から荷物を一つ取ってきてくれるかい。茶色の羊皮紙に包まれているから直ぐに分かるはずだ」

エドワードは慌てて「はい」と返事をした。地下にランプを取りに戻らなければならないので丁度良い。エドワードは早速地下に足を向けようとしたが、不意に腕を掴まれて足を止めた。

「エドワード？ 確かこいつはディランではなかったか？」

片方の手で腕を掴んで、もう一方の手でエドワードを指差しているのは客の男だった。眉間の皺を深くして、唸るような声で男が問う。

エドワードは、再び身体を固くした。

ディランとは誰のことだ、とエドワードは思ったがこの場で口にする勇氣はない。助けを求めるように店長を見ると、店長は「ふう」と溜息を吐き、

「ディランは長期でお休み中。彼は新しい子で、エドワードだよ」

と、やんわりとした口調で男の問いに答えた。

「あと、ルーが名前を覚えているなんて珍しいけど、ついでに顔を覚えていてくれると有難い限りだね」

「私がヒトの顔を覚えるのが苦手なことくらい知っているだろ」

「孫の顔を覚えきれない事はよく知っているよ。それよりも、早くエドワードの腕を離してやってくれるかい？」

男は金の瞳でエドワードを凝視した後、ふうむと唸りその手を離れた。身体の力が抜け、エドワードは思わずよろけたが、今度は優しく男の腕が支えてくれた。

「すみません。ありがとうございます」

反射的にエドワードはお礼の言葉を口にした。

「いや、こちらこそすまなかったな。顔立ちの違いは分かんが、素直に礼を言える所を見ると、お前はあの悪戯坊主のディランとはどうも違うようだ」

「顔付きも大分違っていると思うんだけど、老眼を通り越して目に目がいかれちゃったのかい？」

「店長、こんなに御若いのに老眼なんて言ったら失礼です」

「若い？ ルーが？」

慌てるエドワードを余所に、店長は、あはははと声を上げて笑った。

「エドワードには彼は何歳に見える？」

「いつても四十歳くらい……」

店に入って来た時の印象通りにエドワードは答えた。

「よかったね、ルー。君は随分若く、見られているようだよ」

男の眉間の皺が緩み、その顔に少し困ったような苦笑が浮かぶ。

「ルーはこう見えても結構な年だよ。孫も大勢いるくらいのね」

とても信じられない。もちろんエドワードにも祖父はいるが、杖を突いた白髪の老紳士というイメージがどうしても強かった。髪と同じくらい白い口髭を生やして、厳格に孫達を叱りつけるのだ。エドワードは、その厳格な祖父がどうも苦手だった。その点、確かにこの男も厳格ではあるようだが、彼が放つ威圧感が和らげば、嫌な感じはしない。

「まあ、ルーが若造りなのは今に始まったことじゃないし、これだけびんぴんしてたら信じられないのも無理ないけど」

「本当に、本当なんですか？」とエドワードは念を押すように問う。

「エイプリルフルでもないのに嘘言っでどうするのさ。それこそ彼はこの世界が出来た時から生きてるご長寿ナンバーワンだよ」

嘘は言わないと言った矢先にこれだ。それこそあり得ない。エドワードは肩透かしをくらい、どっと気が抜けた。朝から緊張と驚きの連続で思考を放棄したい気分だった。

けれど――

「それより、エドワード。荷物を早く持ってきて欲しいんだけど。それに早く行かないと下でランプの火が消えちゃうよ？」と、店長が言ったことで、放棄しかけた思考は押し留められた。大事な仕事

を忘れては元も子もない。エドワードは、今度こそ早足に、地下への階段を下りて行った。

一話 常連客【1】（後書き）

感想、誤字脱字の指摘等、お気軽にどうぞ。

一話 常連客【2】（前書き）

起承転結で分割します。

一話 常連客【2】

五分後。エドワードは羊皮紙に包まれた品物とランプを手に戻ってきた。

「ご苦労さま」

労いの言葉と共に店長は、エドワードの手から包みを受け取った。カウンターのの上にそれを置くと、包みを解く。中から出てきたのは、月夜の淡い闇を思わせる深い藍色のセーターだった。よく見れば、男は全く同じ色のセーターを着ている。

「注文の品はこれでよかったかな？」

「ああ。相変わらず、美しい色をしている」

「お褒めに与り光栄だね。で、見たところ今日も派手にやられたみたいだけどいつもみたいに着ていくかい？」

「そうさせてもらえると有難い」

店長の視線を追って、エドワードは男の着ているセーターの裾に目をやった。右脇後方が何かに引っかけたように伸びきっている。多少なりとも伸び縮みするのは仕方がないことだが、仕方がないで済ませられるレベルではないのは明らかだった。

それにしても、とエドワードは思う。

「派手にやったって、何をどう派手にやったらこうなるんですか」

状況が見えず、エドワードは思わずそれを口にした。男は、その裾の伸びきったセーターを脱ぎ渋い顔をする。

「妻、がな……」

「そうそう、アリーがやっただよね」

面白そうに茶々を入れる店長を一睨みして、男は真新しいセーターに袖を通した。店長の言うアリーというのは、どうやら男の妻らしい。

その奥さんの洗濯がよっぽど下手なのか。喧嘩でもして引っ張ら

れたのか。何にしても、男の渋い顔から察するに余りよい理由ではないのだ、とエドワードは思った。

「いい加減にして欲しいのだが、こればかりは仕方がないからな」

「確かにね。だけど、こっちとしてはいつも御贔屓にしてもらって有難い限りだけど」

「店長……」

抜け抜けと言う店長に、エドワードは溜息を吐き、申し訳なさそうに男を見た。しかし、寝起きの店長を見た時と同じようにさして気にした様子はない。

「お前にしか頼めない品だ。また寄らせてもらうさと、男は返した。

「うん。今度からはエドワードが店に立ってることも多いと思うけど、もう苛めないであげてよ。ほら、エドワードも呆けてないで、ルーに顔よく見せときな」

ぐい、と腕を引かれエドワードは男の前に突き出された。

「え、っと、これからよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく頼む」

男は、手を差し出した。それに応じてエドワードは握手を返す。まるで日向の土のような温かな手である。

「さて、そろそろお暇いとまさせてもらおうか」

握手を終え、男は言った。

「もう、かい？」

「仕事もあるからな」

そう言つて踵を返した男の背に、エドワードはどう言ったものか迷つて「ありがとうございました」と言つて見送った。

ベルの音と共に男の姿がドアの向こうに消える。その姿が全く見えなくなったところで、エドワードはだらしなく床に座り込んだ。

すると、頭上から店長の声が降ってくる。

「朝からお疲れだね」

「誰のせいだと思ってるんですか」

「ルーは威圧的だから、慣れるまでは仕方がないさ」

店長のせいだと皮肉を込めたつもりだったのに、話が噛み合っていない。

「僕が言いたいののは、ルーさんのことをなぜ教えといってくれなかったのかってことです」

「うーん、そのことか。もう暫くは日の出から言っつて、店の開店前に来ると思っていたんだけど、今日は単純な誤算ってやつだね」

「誤算？」

「そう。いずれはエドワード伝えるつもりだったんだけど、日の出が遅くなってきたのを計算に入れてなかった」

と、店長は肩を竦めてみせた。

「まあ、これもよい機会だし、この調子で毎朝エドワードに接客してもらうことにしようかな」

「ま、毎朝ですか！」

接客は百歩譲って良いとしよう。しかし、毎朝である。ルーさんは毎朝服を買いに来る必要性があるだろうか、とエドワードは不思議に思った。

その疑問を口にすれば、

「季節によつてベストだったりセーターだったりするけど、毎日、翌朝には裾を伸ばした状態でやつてくるんだよ」

と、店長は何でもないことのように言い、大きな欠伸をした。

「まあ、前の晩に二番の棚に羊皮紙に包んで準備してるから、エドワードがいるときにルーが来たら包みを渡しといてよ」

エドワードは頷いたが、「でも」と言葉を濁した。

他人の家庭の事情を聞くのは忍びなかったが、どうしてもルーの裾を伸ばしてしまう、彼の妻の事が気になって仕方がなかったのである。

「ルーさんとその奥さんってうまくいってないんですか？」

「アリーのことが気になるのかい？」

こんな時ばかり鋭い。エドワードは再度頷いた。

「気になるんだったら、自分の目で見てみると良いよ。ルーが遅くきたから、アリーは今日は早く来るだろうし。夕方まで楽しみに待っておきな」

と店長は、苦笑した。

その言葉通り、ルーの妻・アリーが店を訪れたのは、日が沈んでしばらく経ってからのことだった。

一話 常連客【3】

その女性^{ひと}は漆黒を纏^ひつて現れた。

艶やかな黒髪と黒いドレス。

黒髪で縁取りされた輪郭の中に浮かぶのは、銀色の双眸で、まるで夜空の星のようである。そして、シンプルな黒いドレスは、女性特有のラインをくつきり浮かび上がらせ、彼女のスタイルの良さを強調していた。

だが、それだけでは寒いのか、肩からは淡いクリーム色に金糸の刺繍の入ったストールが巻かれている。ドレスの生地に合わせて、良い素材を使っていることが見て取れた。

「いらっしやい、アリー」

カウンターで新聞を読んでいた店長が、顔を上げ彼女の名を読んだ。

その言葉に、彼女がルーさんの妻なのか、とエドワードの中で好奇心が膨れ上がってきた。エドワードは、高いところを整理するために梯子に足を掛けていたのを忘れ、身を乗り出した。その拍子に、重心が移動して、梯子が後方に倒れていく。

あっ、と息を呑むが、もう遅い。空中で身体の向きを変えることもできず、エドワードの体は、今しがた入店してきた女性の上へと倒れていった。

とすんつ、と音がして、頬に触れる熱と地に足を着いた感触に、エドワードは閉じていた目を開けた。銀色の双眸が自分を捉えている。

「大丈夫？」

と少々低いが、心地よい声で彼女は問い掛ける。

「……はい」

エドワードが戸惑いながら答えれば、彼女はふわりと微笑んだ。洗練された雰囲気を持つ女性なのに、笑うと何とも可愛らしい、と

エドワードは思った。

思わず見惚れていると、

「何、美味しい状態で見惚れてるのさ」

店長の声に、エドワードは我に返る。よくよく見れば、エドワードは彼女に抱きかかえられる形で立っている。

「うわ、ごめんなさい」

エドワードは、顔を真っ赤にして慌てて彼女の腕の中から飛びのいた。ゆっくりと深呼吸をして心を落ち着かせる。酸素が脳まで行き渡ると、思考がはつきりしてきた。冷静になって考えると、それ程高くない所から落ちたとはいえ、女性がヒト一人を受け止めるのは、大変なことである。彼女が尻餅をつかなかったことが不思議であつたが、まずは彼女に怪我がないか確かめることが、幼いながらも紳士としては当然の義務であつた。

「あの、あなたの方こそお怪我はありませんでしたか？」

「私？ 私は、大丈夫よ」

そう答える彼女は確かに大した外傷はないように見える。だが、よく見れば、彼女が肩から巻いていたストールが破れていた。

「ごめんなさい。僕のせいでストールが……」

とエドワードが謝罪を口にすれば、彼女はふるふると首を横に振った。

「気にしないで。これは最初から破れていたのだもの」

「ああ、またルーにやられたんだね」

続いて店長の言葉に、エドワードは戸惑いを隠せなかった。

「そうよ。あの人ったら、毎回毎回……少しは力加減を覚えて欲しいわ」

不機嫌そうに眉を吊り上げて、彼女は言った。アリーさん達夫婦は、やはり仲が悪いのかもしれない、とエドワードは思った。

「じゃあ、いつも通り新しいストールをお求めだね」

「ええ、お願い」

「ちよっと待っててね」

そう答えて店長は、ランプを片手に席を立つた。店長の姿が地下へと消える。店先には、エドワードとアリーだけが取り残された。「新しい子、よね？」

アリーは、夫と違い、人の顔を覚えるのは得意らしい。

「あ、はい。一週間程前からお世話になっています。エドワードと申します」

腰を折って、丁寧にお辞儀をすると、アリーは先程の不機嫌が嘘のように、ふふっと笑った。

「ディランとは大違い。礼義正しいのね」

意図せず、夫と同じ言葉を口にしたアリーに、言おうか、言つまりか迷った後、

「……ルーさんにも、そう言われました」

と、エドワードは結局それを口にした。アリーの顔を窺うと、どうにも複雑な顔をしている。

「あの人に会ったのね」

「はい、今朝……」

「あの人、人の顔を覚えるのが苦手だから、あなたを困らせたのではなくて？」

エドワードが、言葉に詰まっていると、

「全くだよ。ディランと間違えてエドワードのこと苛めてたんだから」

と、丁度地下室から戻ってきた店長が恨めしそうに声をあげた。確かに最初は彼のことを恐ろしく思ったが、店長の言葉はどうも誇張されている気がする。エドワードには、仮にも彼の妻に対して要らぬ誤解を与えてはいけない気がした。彼らの仲が悪いなら尚更である。

だが、店長は、そんなこと露にも気にせず、

「アリーから、よくよく叱っておいてよ」と言った。

「ええ、そうさせてもらうわ」

「よかったね、エドワード。アリーに叱ってもらえば、ルーも反省するさ」

「そういう問題なんですか？ 僕には、要らぬ火種を作ったようにしか見えないんですが」

店長にだけ聞こえるように、カウンターに寄ってエドワードは呟いた。

だが、

「エドワードが思っている程、事態は深刻ではないよ」

そう言って、店長は客へと向き直ってしまう。店長は、ルーに渡したのと同じように、羊皮紙の中から品物を出した。

「はい、アリー。お求めの品だよ」

「ありがとう」

アリーはお礼を言って、その真新しいストールを巻いた。それを見届けて、店長が問い掛ける。

「今日は、他にもお求めの品があるんじゃないかい？」

その言葉を聞いて、アリーは花が咲いたように笑った。

「アルヴィンには、お見通しね。とびきり素敵なおドレスをお願いしたいんだけど」

「明後日は、久しぶりのデートの日だもんね」

「デート、ですか？」

「そう、明後日は久しぶりに二人一緒に出掛けられるの」

この場合、お相手は彼女の夫なんだろうか。でも、

「お二人は仲が悪いんじゃない……」

と、思わずエドワードが漏らした呟きに、

「あら、どうしてそう思ったの？」

とアリーは心底意外そうである。

「エドワードは、ルーが君に裾を伸ばされて新しい服を買いに来たり、アリーがルーにストールを破かれたりしたのは、君達の仲が悪いからだと思ったんだよ」

エドワードに代わり店長がそう答えると、彼女は可笑しそうに笑

った。

「だって、彼、いつも恥ずかしがって手なんて繋いでくれないのよ。だから、私は、彼のセーターの裾を掴むのだけれど、それで毎日毎日伸びちゃうの」

「ルーもいつも同じ要領でアリーのストールを引っ張るしね」

「え、でも、じゃあ、なんでお二人は別々に買い物に？ 店長の話聞く限りじゃ、ルーさんは毎日朝方に、アリーさんは毎日夕方にいらっしやるんでしょ？」

エドワードの疑問に、店長とアリーの二人は互いに顔を見合わせ、苦笑を浮かべた。

「それは、仕方がないことだから……」

「そうそう、エドワードも明後日が何の日か知れば、きっと答えがわかるさ」

一話 常連客【3】（後書き）

遂にルーの裾の秘密が明かされました。でも、彼らが別々に買い物に来る理由は次回に持ち越しです。

感想、誤字脱字の指摘等、お気軽にどうぞ。

一話 常連客【4】

「明後日？」

エドワードは記憶を辿るが、明後日が何の日なのか全く思い至らない。女王陛下の誕生日はもうとくに過ぎてしまっているし、クリスマスはまだ先だ。

「おや、エドワードは本当に知らないのかい。最近はこの話題で持ちきりだったからてっきり知っているかと思ったんだけど」

心底呆れた様子で、店長は肩を竦めてみせた。もったいぶらなくとも良いのに、とエドワードは思ったが、その言葉を口にする前にアリーが口を開く。

「アルヴィン、楽しそうなところ悪いけど、私はそろそろお暇いとまさせてもらうわ」

「ああ、アリーモルーに負けず劣らず忙しいもんね。ドレスの受け渡しは明日で構わない？」

「構わないわ。エドワード君もごめんなさいね。また、今度会えるのを楽しみにしているわ」

エドワードが何か言う前に、ひらりと身を翻しアリーは夜の闇へと消えていった。

それを見送って、

「行っちゃいました、ね」

と、エドワードは名残惜しそうに呟いた。もしかしたら、本人の口から真実を聞ける機会だったかもしれない、と思うと残念なことである。だが、事情を知る人物はまだエドワードの目の前にいた。

「そんなに残念がらなくても、またすぐ会えるさ。あ、それとエドワード、明日は君お休みでいいから」

「何で、ですか！」

事情を知るであろう店長の一言に、エドワードは思わず声を上げる。これでは、明後日まで一人だけ蚊帳の外だ。

「楽しみは最後にとっておくものだよ。それに、アリーからの注文のために明日は俺も忙しいから」

「忙しいなら、尚更、僕が居た方がよいじゃないですか」

「うーん、じゃあ、言葉を変えよう。明日は、エドワードをフォロ―してやる余裕がないから、君はお休み。わかった？」

エドワードは返す言葉がなかった。まだまだ新人のエドワードにとって、お荷物だと言われればそれまでだ。

「まあ、兎も角、明後日が何の日か、これは宿題だよ、エドワード」
言い残して、店長は店先の明かりを消すと店の二階へと姿を消してしまう。

エドワードは、何も聞けないまま暗い店に残されてしまった。すつきりしない思いで、どうする事も出来ずに帰り支度を始める。だが、付けていた黒いエプロンをカウンターに置こうとしたその時、読みかけの新聞が目にとまった。

——十年ぶり！皆既日食——

そんな見出しと共に始まる記事は、明後日、ヨーロッパで十年ぶりに皆既日食が見られることを伝えていた。

その後、帰宅したエドワードは皆既日食——その意味するところを考えた。それこそ、翌日の休みの間も一日中。しかし、答えは見つからない。そうこうしているうちに、一日が経って、とうとう約束の日がやって来た。

だがその日、エドワードが起きたのは十時近くになってからだ。前の晩遅くまで考え込んでいたため、寝坊してしまったのである。そんな自分を悔いたが、急いで準備をして店へ行くと、店長がまるで待ち構えていたかのように待っていた。

「答えは見つかったかな、エドワード」

「今日は皆既日食。そのことまでは分かったんですが……」

エドワードが語尾を濁すと、店長がエドワードの想いを代弁した。

「それがルーやアリーにどう結び付くのか分からない？」

「はい」

エドワードが素直に頷けば、

「エドワードはさ、こう考えてみたことはないかい？夜と昼はなぜいつしよにこないのだろうって」

と店長が言葉を続けた。

「それと、これとがどう関係すると言うんですか？」

「だってさ、日食は昼なのに夜がやってくるだろう？」

全く意味分らず、エドワードは首を傾げるしかない。店長は言葉を選んで、

「文字通り、昼と夜とが同時にやってくる唯一の時だったこと、さ」とそう言った。同時に店のベルが鳴る。振り返れば、ルーとアリーが手を繋いで立っていた。

「やあ、お二人さん」

店長が軽く手を揚げ、挨拶をした。エドワードも二人と目が合い軽く会釈をする。すると、アリーが微笑んだ。

「この間は、エドワード君を色々と心配させちゃったみたいだったから、デートに行く前に挨拶をと思ったのだけれど……。お邪魔だったかしら」

と告げたアリーは太陽の光を凝縮したようなとても温かな色合いのドレスを身につけている。きつとそれが、店長が用意した、とっておきなのだろう。二人が並んでいるのを見れば、そのドレスの色合いがルーの瞳の色だということがわかる。

「お邪魔な訳ないだろ。寧ろ、丁度良いタイミングだ」

「お前の言う、丁度良いタイミングは私達にとってよかった試しがないのだが」

と恨みがましそうに口を開いたルーもまた、アリーの瞳の色に合わせたタイを付けて、仕立ての良いジャケットを着ている。

「もう、あなたったら、話の上げ足をとらないの！これから、エドワードにもお世話になるだろうから、私達の事情をちゃんと話し

ておこうと決めたばかりでしょ」

「しかし、だな。アルヴィンはきつとこのことを見越して、説明をこっちに丸投げするつもりでいたのだぞ」

「アルヴィンだって、勝手に言うわけにはいかなかったのよ。責めるのはお角違いだわ」

うぬう、と唸ってルーが黙りこむ。どうやら、夫婦の力関係はアリーのほうが上らしい。

こうして見ると、二人の仲が悪いと誤解していた自分が馬鹿らしくなる程、二人はお似合いの夫婦だ、とエドワードは思った。

「で、アルヴィン、エドワード君にどこまで話したのかしら？」

「文字通り、今日は昼と夜とが同時にやってくる唯一の時だってこと、までかな」

「それで、エドワード君は首を傾げていた訳ね。ねえ、エドワード君は、私とルーが別々に店にやってくる理由以前に、私達の正体を考えてみたことはなくて？」

「正体、ですか？」

一風変わった夫婦、という以外に、二人に何があるのだろうか。

そう言えば、そこまで深く考えていなかったような気がする。

その事が顔に出ていたのだろう。アリーは、敏感にエドワードの気持ちを読み取った。

「考えたこともなかったのね。じゃあ、もう一度その事を踏まえて、アルヴィンの言葉を思い出して」

「昼と夜……」

ぽつりと呟いて、エドワードは考える。同時にやってきたのは、ルーとアリーも、だ。店長の言う「文字通り」が事実「文字通り」であるのなら……。

考え込むために伏せていた瞳をあげ、

「昼、と、夜」

エドワードは順にルーとアリーを見た。ルーの瞳と髪色は、太陽を凝縮した昼の色。アリーの瞳と髪色は、夜空を思わせる夜の色。

「もう、お分かりかしら？ 改めまして、自己紹介。私は夜を司る精、アリアンロッド。そして、夫は」

「昼、もしくは朝を司る精、ルーグだ」

そう二人は文字通り、昼と夜の夫婦というわけだ。

「店長……」

あまりの真実に、思わず店長を呼ぶ。普通は信じられないような事だが、それが真実であるならば、全てに納得がいく。ルーが朝にしか来れない理由も、アリーが夜にしか来れない理由も。

「ん、何だい、エドワード？」

「嘘じゃない、ですよね？」

「だから、エイプリルフルでもないのに嘘言ってるのさ。

それに、此処は妖精^{フェアリー}の尻尾^{テイル}。靴下から妖精の鱗粉まで揃う店だよ。それは、エドワードが良く知っているだろう？」

この言葉前にも聞いたような気がする、と思ったと同時に、エドワードの脳裏に先日店長の言葉が蘇る。

——それこそ彼はこの世界が出来た時から生きてるご長寿ナンバーワンだよ。

店長は、ルーのことを指してそう言っていた。あれも嘘ではなかったのだ。

「では、本当なんですね」

「そうさ。アリーの掴むルーの裾は昼と夜の境界。ルーの掴むアリーのストールは夜と朝の境界と言ったところだね。そして、今二人が繋いでいる手は……うーん、何て言えばいいのかな？」

「アルヴィン！」

夫婦が揃って店長の名を呼ぶ。恥じらいからか、顔は真っ赤だ。しかし、手はしっかりと繋がれたままであった。

一話 常連客（完）

一話 常連客【4】（後書き）

色々と会話の中に伏線をはってきましたが、十分説明しきれない部分もあるかもしれません。

ですが、くだらなくとも説明をしても、文がだらけてしまっただけなのでこういった形にさせていただきました。

読んでいて、ここをもう少し補足して欲しいなど、ご意見ご感想がありましたら、お気軽にコメント残してください。

*** 一話 設定裏話（前書き）**

一話本編のネタバレを含みますので、一話を読了後にお読み下さい。

* 一話 設定裏話

一話「常連客」

* ルー

本名：ルーグ

アイルランド神話の太陽神に由来して名付けました。

* アリー

本名：アリアンロッド

ウェールズ神話の月の女神の名に由来して名付けました。
銀の車輪という意味らしいです。

神話好きの方はお気づきになったかもしれませんね。

因みに本文中で二人の「孫」の事を言っていますが、これはいかなれば地球上の生き物皆が彼らにとっては孫みたいなもの、と考えて表現してみました。だから、二人は「孫」を見守る祖父母の気持ちで、これからエドワードの力になってくれる……と良いのですが（笑）

そう言ってしまうえば、ディランも「孫」みたいなものなんじゃないか？とお思いの方がいらっしやるかと思いますが、ルーとディランがなぜ仲が悪いのかもいずれ明かされていく、かもしれません。

二話 取引客【1】

その日は冷たい雨が降り注ぐ日だった。雨雲が空を覆い、薄暗い通りにはまだ昼過ぎだというのに、淡く光るガス灯が列をなしている。石畳の道を走る馬車の車輪の音と車のエンジン音が傘を打つ雨の音に混じってリズムを刻んでいた。

轍に溜まった雨水は、馬車が通る度に跳ね上がる。エドワードは器用にそれを避けながら、傘の下で笑った。この国では傘をさす文化は乏しいが、店長に借りた何の変哲もない黒い傘は、思わぬところでエドワードの気分を高揚させた。軽快な雨音と傘から伝わり落ちる雫、早足に行きかう人々の足——傘の合間から見える景色はいつもととは違って見えた。

大通り沿いのカフェで休憩を取り、店へと戻る帰り道であったが、エドワードはこの雨に濡れた大通りを後にするのが名残惜しかった。しかし、腕時計を見ればそうゆっくりもしていられない。雨音に合わせて歩を進め、いつもの路地を抜ける。すると、珍しいことに店の前には黒塗りの車が一台停まっていた。エドワードも最近知ったことだが、この辺りの道は大通りと違い一方通行が多いため、よくよくその事を知っている馴染みの客は、店の前まで車を乗り付けることはしない。

となると、一見さんか——とエドワードが思っていると、丁度、店から一人の男が羊皮紙に包まれた包みを手に出してきた。中肉中背で口髭を生やした中年男だ。少々顔色が悪く、男が身につけているのはブラウンの背広と同じような土気色をしている。また、背広は身体に合っていないのか肩が落ち、スラックスの裾は引き摺られ気味だった。店長には負けるが、なんともだらしない。だが、だらしない割に、着ている物はそれなりによい物なのが、エドワードには気に掛かった。

いや、エドワードが気に留めたのはそのことだけではなかった。

「どこかで見たことあるような……」

男の顔にどこか見覚えがあったのである。エドワードが記憶を辿っている隙に、男は運転手が開けたドアから車に乗り込み、ブロロ口口という独特のエンジン音と共に車は走り去ってしまった。

それを気にせず尚も記憶を手繰り寄せ、エドワードは、

「あ！」

と声をあげた。思い出したのである。

彼はエドワードの母の知人だった。エドワードの母が病に倒れてしまふ前までは、エドワード自身彼と何度か言葉を交わしたことがある。母が病に倒れてからは、顔すら見なかったが、以前に比べると少々痩せた気がする。見かけない間に何があったかはしれないが、以前の男はもう少し肉付きの良い体つきをしていたのだ。男の服が体に合っていないかったのは、昔の服をそのまま身につけているためだろう。

それにしても、とエドワードは首を傾げた。

彼はいったい何を買いにきたのだろう。

彼自ら、日用品を買いに来る必要性などない。使用人に事付ければ済むことだ。だが、それをしなかった理由に思い至らない訳でもない。そう——なぜなら、男が出てきたあの店は妖精の尻尾フェアリーテイルなのだ。それこそ、店長は、靴下から妖精の鱗粉まで何でも揃えられると負している。社交界は嗜好が多いからどこからともなくその嗜好を耳にしたのだろう。興味本位か、それとも——。

「つつ！」

考え事をしながら歩いていたエドワードは、背中にした衝撃に歩みを止めた。思考を放棄し、振り返れば、その原因は雨に濡れた細身の女性であった。着ているものは男物のパンツであったが、上着の下にはふくよかな女性特有の膨らみがある。腰先まであるうかという雨に濡れた茶髪は、元々癖が強いのか四方にはねている。

「悪い……」

どうにも男勝りな言葉遣いで謝罪を述べて、彼女はエドワードの

横を擦り抜け、店へと続くステップに足を掛けた。

「あの、お客さんですか？」

エドワードが遠慮がちに問い掛ければ、

「違う！ 俺はあいつを殴りに来たんだ！」

と、彼女は拳を握ってエドワードを振り返った。

「殴りに？」

あいつ——と言うのはこの場合、店長の事だろうか、とエドワードは目を瞬かせた。

その隙に、女はエドワードに対する興味を失ったらしく、ずんずんとステップを上っていく。

「アヴィー！」

女は乱暴に店のドアを開けると、声を張り上げた。その拍子に雨に濡れた髪から、いくつもの水滴がぱらぱらと飛ぶ。彼女は床に染みを作るのも気にせず、カウンターまで歩を進めた。

それを見てエドワードは慌てて後を追う。掴み合いの喧嘩になったら大事だ。ルーに比べたら店長は一見細身であったが、それでも彼は、エドワードでは遠く及ばない均衡のとれた体つきをしている。店長だつて女性に手を上げるつもりはないだろうが、喧嘩になったら何の拍子に怪我を負わせるとも限らない。

エドワードが傘立てに傘を立てて、後ろ手にドアを閉めると、女はカウンターに拳を押しつけたところだった。木製のカウンターに力が伝わり鈍い音がする。

「アヴィー！」

女は再度声を張り上げて、店長を読んだ。

「そんなに声を張り上げなくても聞こえるさ、ニーヤ」

声と共にカウンターの奥、二階に続く階段から、湯気の立つポットと白い磁器のカップの乗った盆を手に店長が降りてくる。どうやら、先程の客を見送った後新しくお茶を淹れなおしていたらしい。商談用の丸テーブルには、籠に入れられた焼き菓子が置かれたままになっている。

「アヴィー、居るなら居るで、さつさと出てこい」

「全く、無理な注文を付ける客が帰ったと思った矢先に厄介事だ。出てったら、ニーヤは俺を殴るだろう？」

「当たり前だ。分かっているならさつさと殴らせる。そうでもしないところの怒り、収まらない」

「相変わらず、短気だなあ」

店長が肩を竦めて言う。その仕草が余程女の怒りを呟ったのか、彼女はカウンター越しに身を乗り出し、

「そもその原因を作ったお前が言うな！」

店長を捕まえようと腕を伸ばす。その腕をするりと交わして、店長はカウンターの外まで出てきた。女は虚を突かれて、慌ててカウンターから身を起こすが、その隙に店長は商談用の丸テーブルまで移動していた。

「まあまあ、落ち着きなよ。君もおやつ食べるかい？」

盆をテーブルに置き、テーブルを囲むようにして二脚並んだ木製椅子の一つに腰かけて、店長が籠を掲げて見せる。

「食べない。そんな事より、例の物を返せ！　今返せば、殴らずに済ませてやる」

女が身体を反転させて店長を睨む。その目に動揺も示さずに、
「無理」

と言つて、店長はクッキーを一口に放り込んだ。

「無理、だと？」

「ついさっき売ったばかりさ。そのお客、富を手に入れるために必要だと言つてたけど、何でそんなものばかり求めるんだか理解に困るよ」

クッキーを咀嚼しながら、ももごと店長が答える。それを聞いて女の身体が怒りから震え、俯き加減に拳を握る。しかし、耐え切れなくなったのか、女は拳を振り上げた。

次の瞬間――

鈍い音がして、頬を真っ赤にして店長が床に倒れ込んでいた。

二話 取引客【1】（後書き）

感想、誤字脱字の指摘等お気軽にどうぞ。
些細なことでも感想残して頂けるとうれしいです。

二話 取引客【2】

「店長！」

エドワードは、店長を助け起こそうと慌てて駆け寄るが、店長はそれを手で制す。そうして自力で上半身を起こした店長は、口の端に滲んだ血を拭い、自分を見下ろす女に向き直った。

「その短気な所直した方がよいと思うな。それとも、お腹が減ってカッカッしているだけなのかい？」

店長の言葉に女の顔がぼつと赤くなる。それは、怒りで頭に血が上っているようでもあったし、恥ずかしさに顔を赤らめているようでもあった。そして、店の中に一瞬沈黙が生まれ、きゆう、ぐるるるるるるる。

独特の高い音に続いて、くぐもった音が尾を引く。それが腹の音だとエドワードが気付く前に、女が自分の腹を抱えて蹲った。

それを見て店長が、

「やっぱり、お腹が減っていたんだ」と言う。

そうか、だから先程からカッカッしていたのか、とエドワードは納得する。同時に、「だから何だって言うんだ！」と女がより一層顔を赤らめて店長を睨んだ。だが、それがわかってしまうと、女からはもう先程までのような攻撃的な雰囲気は感じられない。

「最近、仕事が芳しくないらしいじゃないか？ 収入もなかったんだろっ？」

「……………」

女は一瞬開きかけた口を噤んで、店長を見た。反論しようとしたが、言葉が出てこない様子だった。沈黙は肯定——店長はそう受け取ったのだろっ。

「だから、俺はニーヤのために思ってアレを売ったんだ。アレを売れば暫くは食うに困らないだろ？」

「だが、俺には何の断りもなかった……」

収入の無くなってしまう彼女の少しでも生活の足しにしようと、店長が彼女の大切な何かを売ってしまったのが事の発端らしい。

だが、店長にとっては親切心からの好意でも、彼女の了解を得ていないのではまずいのではないかとエドワードは思った。

「店長、今からでもソレを返してもらうことはできないんですか？」

「できないこともないけど……。どちらにしろ、ニーヤに仕事をする気になって貰わないことには始まらないかな」

曖昧に店長が笑い、エドワードは言葉に釣られ女を見る。

「言っておくが、俺にだって客を選ぶ権利はある」

と彼女は恨めしそうに口を尖らせた。それを聞いた店長が、紅茶を啜って眉を顰めた。先程、殴られた時に口の中を切ったのか、それとも彼女の言葉に対して思うところがあつたのか微妙なところだ。「そういうことは、普段ちゃんと仕事をしている奴が言うものじゃないのかい？」

「……アヴィーは俺が仕事をしていないと言いたいのか？」

「だって、事実だろ。ニーヤが仕事をしていたら、こんな事にはなっていないかつたさ」

店長はなんだか責任転嫁している感も否めなかったが、女の方もあるところがあつたのだらう。彼女は唇を噛んで押し黙ってしまう。

その間に、とエドワードは思考を巡らせた。よくよく見れば、彼女の肌は、色素の薄い白人と比べて日に焼けたような小麦色をしている。昔から、強制的にしる、自主的にしろ、働き手としてこの国に来る他国の人間は多い。エドワードはさしてそのことを気にしたことはなかったし、人種差別をする気もないが、彼女の肌の色が満足な賃金を得られなかった理由になるのかもしれない。

だが、そこで気になってくるのは彼女の仕事である。先程からの二人の遣り取りからは、エドワードが考え付くに至った悲観的な状況がどうも感じられない。寧ろ、見方によっては彼女の客より彼女の方が上位に立っている観すらあつた。

エドワードがその単純な疑問を口にすると、

「ニーヤは、謂わば？何でも屋さん？なんだ」

と店長は言った。

「？何でも屋？？」

「そう、？何でも屋？。それこそ、家事から厄介事まで何でも引き受けてくれるよ。まあ、その分、報酬は高いけどね」

簡単に言ってしまうえば、この妖精の尻尾と根本的には同じような違いがあるとするれば、客が求めるモノが『物』であるか『労力』であるかだ。だが、それはきつと大きな違いだろう。　そもそも――
「家事なんてメイドを雇えば済むことですし、厄介事にしても他人に首を突っ込んで欲しくない人だっているでしょうに……」

素直に思ったことを口にして、エドワードは、しまった、と思った。目の前には、未だ口を噤んだ女が居る。彼女の肩は何かに耐えるように小刻みに震えており、彼女の先程の怒りようを思い出すと、エドワードは身を縮めずにはいらなかった。

二話 取引客【3】

「ニーヤ、抑えて、抑えて」

店長がまるで馬を静めるかのように女を制する。それで女は自分が感情的になつていることに気付いたのか、一度大きく深呼吸してから口を開いた。

「そんな簡単な話で済んだなら苦勞はしないさ」

「そうだね。メイドを雇えばなんて、お坊ちゃんのエドワードだから言えることだし、それに……ニーヤが仕事をしないのは昔忙しすぎた反動でもあるだろうし」

そこでやっとエドワードは自分が二重の失態を犯したことに気が付いた。エドワードの思う普通の生活と世間一般でいう普通の生活とは違ふのだ。そのことをこの店で働き始めて知つたのではなかったか。

「すみません」

エドワードはふるふると頭を振ることで恥じる思いを振り払い、謝罪を口にした。間違いを犯せば、それを悔い改め、次に生かせば良い。それもエドワードがこの店で学んだことの一つだ。

素直なエドワードの反応に店長が頬笑みを返す。女も興味深そうにエドワードを見ていた。

そこでエドワードは改めて女に意識を向けた。店長の話聞く限りでは、彼女には仕事がないのではなく、本当に仕事をする気がなかったのだ。それでいてお腹を空かせて八つ当たりしているようでは、店長が彼女に「仕事をしろ」と言うのも頷ける。勝手に彼女の大切な物を売ってしまったのはいただけないが、自業自得の観も否めない。

エドワードが困つたように眉を寄せたのを見て、

「ともかくだ、俺の仕事の事は置いておいて、速やかな品物の回収、返品を要求する」

と鼻息荒く女は言った。

「そんなこと言われても、日暮れにはアリーが来るし、俺は店を離れられないからなあ……」

そう言いつつ、店長の目がエドワードに向く。悲しいことに、エドワードには次に続く言葉が予想できてしまった。

「エドワード、ニーヤと一緒に往いてくれるかい？」

もちろん、エドワードに拒否権なんてあるはずがない。それに、先程の発言に対する引け目もあった。エドワードが素直に頷くと、

「なかなか、物わりの良い店員じゃないか」

と女がエドワードの背中を力強く叩く。エドワードは、背中を摩りながら、

「で、店長、売った相手の事はご存じなんですか？」
と店長を見やった。

「それが、よく知らないんだ。茶色の背広を着た中年男っただけで、他の事はあんまり知られたそうじゃなかったから……」

「それって、もしかして、ロイドさんのことですか？」

「名前を知っているってことは、エドワードの知り合い？」

「先程、店から出て行つた男の人がそうなら、ある意味知り合いです。と、言つても？母の？ですが」

エドワードは車に乗って去つていった男の姿を思い浮かべながら言つた。

「ふーん、道理で身なりがよいと思つた。でも、エドワードの知り合いなら、貴族階級の出だろう？」

「はい、確かそうだったと思います。郊外の大きな屋敷に住んでいたはずですから」

「——だつてさ、ニーヤ。郊外だと、馬車で行つた方が早いかな？」

店長の言葉に、女は顔を青くしてうるたえた。

「俺は嫌だぞ。あんな狭つくるところに押し込められて運ばれるのは」

心底嫌そうな、その様子を見て、店長は「彼女は狭所恐怖症なん

だ」とエドワードに耳打ちした。忙しすぎたために仕事嫌いになったり、狭所恐怖症だったり、彼女にはトラウマが多いらしい。

だが、市街地から郊外までは結構な距離があり、馬車を使わず行こうとするなら、日が暮れてしまうのはわかりきったことであった。遅くなれば家人や家族が心配する。どうしたものか——とエドワードが悩みかけたその時、ベルの音と共に、今から訪ねようとしたはずの男が店に姿を現した。男はエドワードとニーヤには目もくれず、その横を通り過ぎた。それがさも当然であるかのように、丸テーブルの傍らに立つ店長の前まで足音を響かせてやって来ると、羊皮紙に包まれた品物を突き出した。

その途端、隣に立った女の気配が変わったのを、エドワードは感じた。見れば、自分達に背を向けるようにして店長と向かい合うその男をじつと睨んでいる。

それに気付かないのか、鈍感な男は苛立たしげに口を開いた。

「どういうことだ？」

「どういうことだ、と言いますと？」

聞きようによつてはとぼけているような言い方で、店長が返す。それが気に障ったのか、男は手にしていた品物をテーブルに叩きつけた。羊皮紙特有のざわめきに近い音を立てて、包みの中から、品物がテーブルの上に飛び散った。

一つは、よくわからない言語が表紙に書かれている本。そして、もう一つは鈍い音を立ててテーブルの下へ落ちていった。エドワードからは見えない位置だが、音からしてどうも金属製の物らしい。「とぼけるのか！ 偽物を掴ませただろう？ 車内で使ってみたが何も起こらなかったぞ！」

怒りに任せて言い募る男に、冷やかな目を向けて、

「車の中でお使いになったのですか？ あれほど、広い場所だと念を押しましたのに」

と店長は言った。

二話 取引客【3】（後書き）

起承転結の「転」辺りです。

一話のほのぼのとした雰囲気とは違って少し殺伐となってしまうているかもしれませんが、今回の話は設定的に仕方のない部分もありますのでご容赦を。

感想、誤字脱字の指摘等、些細なことでもコメント残して頂けると嬉しいです。

二話 取引客【4】

その目が気に障ったのか、

「——いんちき業者の分際で！」

と顔を真つ赤にして、男が捲し立てる。店長はそんな男を気にか
けず、テーブルの上に放り出されたままの本を手を取った。そのま
ま、ぱらぱらとページを捲り、目を走らせる。そして、あるペー
ジで手を止め、顔を上げた。

「ニーヤ、やっぱり名前が書かれているよ。どうする？」

「貸せ！」

店長の問い掛けに女は短く言う。すると、店長の手になっていた
ずの本が女の手の中にあつた。ぽんつとまるで手品のように、エド
ワードが瞬きをする一瞬のうちに本が移動していたのだ。

エドワードは驚きに声も出せず、ぱかんと口を開けて店長と女を
交互に見た。だが、男の方は、店長と女のその一連の動きに、より
一層顔を赤くして目を吊り上げている。

「手品を見せて、気を引こうと思ったのだろつが、そうは行かん。
品物は返品する！ 支払った額はきつちり耳を揃えて返してもら
うからな！」

男のその宣言を聞いて、にいいい、と口角を上げ、女が笑つた。
小麦色の肌の合間から見える白い歯がエドワードに一種の恐怖を抱
かせた。背筋を走つた悪寒にエドワードは身震いをする。

男の宣言に返答するように、

「その宣言確かに聞きいれた」

と女が言つた。

その瞬間——

女が手にしていた本がまるで雷が走つたかのように一瞬光り、男
の頭上からひらりひらりと一枚の紙が降つて来た。それは紙幣大の

長方形の紙で、男は腕を伸ばし、素早くその紙を引つ掴んだ。

「あーあ、折角の臨時収入だったのに……」

店長の残念そうな呟きが、エドワードの耳に入る。その呟きに、あれは男が支払いに使った小切手なのだと、エドワードは悟った。その証拠に、店長のその呟きを聞いた男は、店長を一睨みした後、その紙を大事そうに背広の内ポケットに仕舞い、もう用は済んだとばかりに踵を返してしまう。

だが、意外なことに男の前に女が立ち塞がった。

「何だ。もうこちらに用はないぞ」

眉間に皺を寄せ、男が女を睨む。女の身長が高いため、男は彼女を見上げる形になる。

「直に済む」

女は男の言葉を無視して、その身を屈めた。

ちゅっ。

「なっ！」

一部始終を見ていたエドワードは、動揺を隠せなかった。女は事も無げに、男の額に接吻を送ったのである。

「さあ、俺の用も済んだ。何処へなりとも帰るがいい」

女は事が済むと男に道を譲った。女がドアを指差すとドアがひとりでに開く。男は女の言葉に促されるまま、ふらふらとドアの向こうに消えて行った。女の接吻に対して男が何の反応も示さないのが不思議でならなかったが、エドワードは呆氣にとられたままその背中を見送ることしかできなかった。

男の姿が消えると、ドアが再びひとりでに閉まった。その音に混じって、乾いた木を叩いたような音が店の中に響く。

それに続いて、

「痛っ！」

と店長が声をあげた。

エドワードがはっとして声の方を見やれば、テーブルの下に膝を付いて店長が頭を擦っている。一本の支柱の先で別れた三本脚で支

えられたテーブルが揺れていることから、テーブルの縁にでも頭をぶつけたのだろう。

「大丈夫ですか？」

響いた音は軽快なものだったが、分厚いテーブル板は思った以上に固い。以前家で同じようにテーブルに頭をぶつけてたんごぶを作った記憶がエドワードにもあった。しかし、氣遣うエドワードを余所に、女が情けなく頭を擦る店長を見てはんつと鼻で笑う。

「俺の本を勝手に売ろうとした報いだ。自業自得だな」

「そりゃないよ、ニーヤ。俺はこれを拾おうとしただけなのに……」
膝を付いて低くなった顔の位置まで手を上げ、店長がその手に持った物を掲げて見せる。

それは、逆三角形を歪に潰したような形をしていた。蛇を模った持ち手、その対側にスツと上に伸びた口。エドワードはそれを本の中で目にすることがある。

「……アラビアン・ナイト」

エドワードが思わず呟いたのも無理はない。店長が手にしていたのは、正しくアラジンと魔法のランプを連想させるに相応しいランプだった。

「おや、エドワード、今日は鋭いね」

ここは妖精の尻尾^{フェアリーテイル}なのだ。こういう経緯でロイドがこのランプを求めたかは知らないが、

ジンの宿ったランプであつても不思議ではない。店長がランプを擦る。エドワードは次の瞬間を見逃しまいと大きく目を見開いた。

だが――

「なーんてね。中にジンはいないから擦っても何も起こらないよ」
ランプには何も変化が起こらない。店長は肩を竦め、ニーヤを見やった。

「ねえ、そうだろ、ジンニーヤー」

と店長の確かに彼女に向かってそう言った。

「俺は狭いところが嫌いなんだよ。中にいなくて悪かったな」

ニーヤは腕を組んで、恥かしそうに顔を逸らした。

「えっ、つてことは？」

「そう、彼女がこのランプに宿るジンニーヤー。ジンニーヤーとはつまり女性のジンンってことだね」

ジンにはもつと大きな男のイメージがあつたエドワードは、ニーヤをまじまじと見た。確かに、気性が荒く怒りっぽいジンの性質を色濃く宿している。彼女がアラビアン・ナイトのジンのように人の願いを叶えるジンだとしたら、何でも屋の呼称に相応しいのも間違いなかった。

エドワードの目をまっすぐに見詰め返し、ニーヤは口角を吊り上げた。エドワードはその目に縫いとめられたように動くことが出来ない。

「エドワード、お前の願いなら叶えてやってもいいぞ」

ニーヤはその身を寄せて、手にしていた本をエドワードに握らせる。

「ニーヤ！」

窘める店長を一瞥して、

「まあ、今回はあいつが煩いから止めておこう」

とニーヤは言った。そしてパチンツ指を鳴らすと、その手の内には店長が手にしていたランプがある。

「腹も膨れた。俺は帰って寝る。本は預けておくぞ」

そう言つて彼女はエドワードの額に接吻を落とした。唇の感触が離れると同時に、彼女の姿が煙に包まれる。煙が晴れるとそこにはもうニーヤの姿はなかった。エドワードは手にした本に視線を落とす。

「エドワード、彼女との取引は君にはお勧めしないよ。報酬は高いと言つただろ？ 本に名前を書いて契約したら最後、願いが叶えば彼女は人の魂の一部を食べてしまうんだからね」

店長の忠告を耳にしてエドワードは本を取り落としそうになった。ランプが彼女の住処なら、この本は彼女との契約書であつたのだ。

二話 取引客（完）

二話 取引客【4】（後書き）

***二話 設定裏話（前書き）**

二話本編のネタバレを含みます。二話を読んだ後にお読みください。

*二話 設定裏話

二話「取引客」

*ロイド

ケルト語起源で、「灰色」を意味しているらしいです。

本当は「灰」を意味する名前にしたかったんですが、流石にそんな名前はないかな、と妥協しました。

なぜ、「灰」に関連させたかというと、ジンは、煙の無い火から生まれた種族だという話もあるためです。つまりはジンと取引した後
の「燃え滓」の意味を含めてロイドにしてみました。

*ニーヤ

本名? : ジンニーヤ

皆さんの良く知るジンは複数形らしいです。

単数形は母音だけが変化し、男性形はジンニー、女性形はジンニーヤー。

ニーヤは二話も登場予定ですので、その他、詳しくは控えさせていただきます。

三話 配達業者【1】

その日、エドワードは用事があつたためいつもより三時間ほど遅れて店にやって来た。

— You can get anything from socks to fairy's scales —

（靴下から妖精の鱗粉まで何でも揃います）

そのプレートが表になっていることを確認して、店のドアを開ける。すると、いつもの薬草と油の匂いに混じって、甘い花のような香りがエドワードの鼻をついた。続いて目に飛び込んできたのは、商談用の丸テーブルの上で繰り広げられている小さなお茶会である。さほど大きくもない直径一メートルほどのテーブルの上に、店長愛用のティーセットと籠に入ったスコーン、小さな透明なガラス容器に詰められた黄金色に輝く蜂蜜が並べられている。そのテーブルを囲んで楽しそうに談笑しているのは、店長と――

「ニーヤさん、いらしてたんですか」

ジンニーヤであった。エドワードが彼女の名を呼ぶと、ニーヤはまるでテーブルの上の蜂蜜を溶かしたような甘い笑みを浮かべた。「おお、エドワード、やっと来たか」

ニーヤはパチンツと指を鳴らし、何処からともなくもう一脚椅子を出すと、エドワードをそちらに促した。

「まあ、座れ」

エドワードは手袋とマフラーをコートのポケットに詰め込むと、コートを脱ぎ、傘立てと共に入口脇に置かれた洋服掛けにそれを掛けた。そして、促されるまま席に着くと、店長がポットから熱い紅茶を注いでくれる。花のような香りが湯気と共に立ち昇り、琥珀色の液体が白い磁器のカップに並々と注がれた。

「ミルクはいるかい？」

店長の問いに頷くと、たつぷりとミルクが注がれる。店長はソー

サーにカップを置き、蜂蜜の容器を添えて、エドワードにそれを差し出した。

「ありがとうございます」

エドワードは礼を言っ てそれを受け取ると、蜂蜜をすくってミルクティーに溶かした。スプーンの作った波紋が収まらないうちに、カップに口を付けると、冷えた身体が中からぽかぽかと熱を持ち始める。蜂蜜の帯びた仄かな薔薇の香りとまろやかな口当たりがエドワードをほっとさせた。

「おいしい」

自然ともれた言葉は心からのものだ。

「だろ？ 君が居ないと聞いて怒ったニーヤをころりと黙らせたくらいだからね」

と店長が苦笑を浮かべる。つい先日、エドワードもニーヤの怒り様を見ているだけに店長の言いたいことは理解できた。食べ物の力というものは偉大だ。ひとの心を一瞬にして変えてしまう。

「ところで、ニーヤさんは僕に何の御用だったんですか？」

「いや、用と言う程の事じゃないんだが、近くまで来たものでな…」

…

「よく言うよ。近くまで来たも何も、君の家はすぐその借家だろ？」

店長の言葉にエドワードは首を傾げた。ニーヤの住処はあのランブだと思っていたが、どうも違うらしい。

「ニーヤは狭所恐怖症だからね。昔は確かにあのランプに住んでいたけど……。壺に閉じ込められた仲間の話を聞いてから、どうも、あの中は居心地が悪いらしい。気に行った場所を見つけて部屋を借りているのさ」

へえ、とエドワードが納得したように呟くと、ニーヤと目が合った。ニーヤは恥ずかしそうに頬を染め、顔を背けてしまう。誤魔化すように蜂蜜を付けたスコーンをほおばる姿は、とても短気で怒りっぽいジンには見えない。

その姿に半ば茫然と見惚れていると、

「すっかり、気に入られちゃったね、エドワード」

と店長から声が掛かる。

「てつきり本を受け取りにきたとばかりに思ってたんですが……。これで良いのでしょうか？」

「良いものにも、契約書を君に預けているのは彼女の意思だし、特に用もないのに君に会いに来たのも彼女の意味だからなあ。それだけ、君が彼女に気に入られているってことだよ」

そう言いながら店長は、自分のカップに新しくお茶を注いだ。

「そんなことよりエドワード、君、蜂蜜を扱う業者に知り合いはいるか？」

「えーと……家の出入りの業者はいるかもしれませんが、個人的には覚えがないです」

エドワードの答えに、店長は紅茶を一口飲んで唇を湿らせると唸り声を上げた。その声に、ニーヤも興味深げに顔を向ける。

「なんだ、アヴィー、蜂蜜がどうかしたのか？」

「この蜂蜜、薔薇蜂蜜ローズハニーなんだけど、これを届けてくれた子がエドワードは来ていないのかって、尋ねてきたんだ。可愛い赤毛の女の子だったよ。歳はエドワードと変わらないくらいだったから、知り合い（ともだち）かと思ったんだけど……」

赤毛の女の子——記憶を辿るが、そんな知り合いエドワードには思い当たる節などなかった。

三話 配達業者【2】

第一、この国では赤毛は忌み嫌われる時代が長かったのだ。貴族の家に赤毛の少女が出入りすることは少ないだろう。

それに、例えばエドワードには、同年代の知り合いは少なかった。この国の上流階級は、エドワードくらいの年齢になると寄宿学校パブリックスクールに入るか、それが叶わなければ、家庭教師を雇うのが一般的だ。エドワードは後者。病気に伏せた母の元を離れるのが忍びなくて、結局、寄宿学校パブリックスクールに入学することを断念したのである。もちろん、エドワードの両親はそんな彼の状態を心配した。頻りにガーデンパーティーに連れ出したり、話し相手に家令の息子を連れてきたりもしたが、ガーデンパーティーの客はエドワードより遥かに年上ばかりだったし、家令の息子はエドワードと年齢は近かったが、やはりどこか遠慮があった。

そうだった理由で、エドワードには同年代の知り合い（ともだち）は少ないのである。相手が女の子であれば、尚のことだった。しかし、そんなエドワードにも一人だけだが、女の子の知り合いはいた。その子の名はフェリシアと言って、エドワードにとってはいわゆる許婚に当る人物だ。だが、彼女は赤毛ではないし、エドワードと同じ貴族階級の彼女が蜂蜜の配達をするなんて考えられない。何より、エドワードはつい先ほど彼女に会ってきたばかりなのだ。温室で育てていた花が綺麗に咲いたから、ぜひ見に来て欲しいという誘いをエドワードは断りきれなかったのである。

「その顔を見ると覚えがないみたいだね」

店長がエドワードの表情を正確に読みとって、言った。エドワードは、はっとして店長に意識を向ける。

「すみません。僕の知っている子ではないみたいです」

エドワードが言うと、店長が「エドワードが謝ることじゃないよ」と首を振った。

「そうだぞ、エドワード、気にすることはない。向こうの勘違いだろ。エドワードなんて名前、他にもたくさんいるからな」

とニーヤもその意見に賛同する。

「うーん、でも、そうすると、彼女には悪いことをしたかな」

「悪いこと？」

「そう、エドワードがいる時間帯にもう一度来てくれるように言っただけだ。勘違いなら、彼女の時間を不意に奪ったことになるだろ？」

店長は困ったように肩を竦めた。ニーヤはエドワードの時とは違い何食わぬ顔でスコーンを頬張っている。

代わりにエドワードが、「でも、悪気があった訳じゃないのでしよう？」と気遣いを見せると、

「そうだね。まあ、仕方がないか。丁度蜂蜜のお礼も言いたかったしね。よい方に考えよう」

店長は、蜂蜜をたっぷり溶かしたミルクティーに口を付け、幸せそうに目を細めた。

それから、蜂蜜とスコーンでお腹を満たしたニーヤが帰り、アリーの訪れを待つばかりの頃――。赤毛の少女の来訪はそんな時間帯のことだった。

アリーに渡すはずの品を地下へ取りに行っていたエドワードは、階段の途中、カウンターに立つ店長の肩越しに見えた鮮やかな赤毛に動きを止めた。店先に灯された光を浴びて、その赤はまるで炎のように揺らめいていた。

赤毛は忌み嫌われているはずなのに、美しい、とエドワードは素直にそう思った。エドワードが声もなく見惚れていると、

「エドワード、階段の途中で立ち止まって何をしているんだい？」

気配に気付いた店長が、こちらを振り返る。つられて少女がこち

らに目を向けた。

エドワードのヘーゼル色の瞳と、少女のグリーンの瞳が交差して、エドワードは思わず手に持っていた品物を取り落としてしまった。羊皮紙が階段で擦れ、独特の乾いた音を立てた。だが、エドワードはそんなこと、気にも止められないくらい驚いていた。

カウンター越しに自分を見下ろしている少女の顔はエドワードが知る人物によく似ていたからだ。

そして、

「お会いしとうございました、エドワード様」

少女から発せられた声もまた、その人物を連想させるに十分なものだった。

「フェリシア……」

エドワードが口にした名に、彼女は？フェリシア？に似た、しかし彼女とはどこが違う、色めかしい頬笑みを浮かべたのである。

三話 配達業者【3】

「何だい。エドワード、やっぱり知り合いじゃないか」

店長の呆れたような表情がもれる。それを否定したのは以外にも目の前の少女だった。

「いいえ。エドワード様は、私をフェリシア様とお間違えになったのです。私たちは初対面ですもの」

その声に、またもフェリシアの姿を思い浮かべ、エドワードはその考えを振り払うために頭を振った。階段に落ちた荷物を拾い上げ、カウンター越しに少女と向かい合う位置までやってくる。そして改めて少女を見詰めた。不躰だとわかつていたが、エドワードは彼女がフェリシアでない確証が欲しかったのだ。

「君はフェリシアのところのお屋敷の子なの？」

エドワードの質問に、少女は「はい」と肯定する。

「君と彼女は姉妹なの？」

続いて、探るように相手の瞳を窺って、エドワードはその疑問を口にした。エドワードは、彼女に姉妹がいるという話を聞いたことがなかったからである。しかし、それが赤毛の子だというなら話は別だ。社交界の嘲りを受けることを避けるために意図して彼女の存在を隠していた可能性だってある。

だが、そうすると気になってくるのは少女の口調であった。まるで、フェリシアが彼女の主であるような物言いをする。そして、彼女が身につけているのは、確かにメイドが着るような動きやすい紺のドレスであった。

考えが頭の中でぐるぐると廻り、エドワードはただ彼女の答えを待った。

「姉妹……ですか？ 恐れ多いことでございます」

「こんなに似ているのに姉妹じゃないって言うのかい？」

「ええ。フェリシア様が姉妹のように大切な人であることは間違い

ではございません。ですが、残念ながら血の繋がりはございませんわ」

少女の言葉に、とても信じられない、とエドワードは言葉を失った。横で一部始終を見守っていた店長も困惑した表情を浮かべ、「えーと、話を整理させてもらうと、君はエドワードの知り合いのフェリシアとよく似ている。だけど、彼女との血縁関係は全くないと言っただね。どうやらそのフェリシアと知り合いではあるみたいだけど……」

と少女に確認する。

「はい」と少女ははっきりと答えた。

「となると、君はそのフェリシアの遣いできたのかい？」

「それはないと思います。僕は店のことは話していませんし。仮に知っていたとして、今朝彼女に会う約束があったのに、その時間帯に態々店に人をやる必要性はないはずです」

エドワードと店長は互いに顔を見合わせて、揃って少女に目を向けた。

その動作に少女は苦笑を浮かべたが、直に表情を引き締める。

「エドワード様のおっしゃる通りでございます。こちらには私の独断で参りました。エドワード様が、このお店で働いていることは友人を通して知りました。その友人が今日こちらに蜂蜜を届けに行く」と申しておりましたので、無理を言って代わってもらったのです。

私が私でいられるうちに、どうしても、フェリシア様の想い人にお会いしておきたかった……」

「王子？」

エドワードより先に店長が素っ頓狂な声を上げる。眉間に皺を寄せ、笑いを堪えているような、そうでないような複雑な表情だ。確かに、今までの彼女の言葉遣いから「王子様」という言葉が出てくる事など想像できなかったから、そのような反応も仕方がない。現に、エドワードも少女の口から紡がれた言葉に面食らっていた。

「そうです。乙女にとって、想い人は皆、王子様なのです」

「ふーん、でも、そのフェリシア様の想い人に会って君は何がしたかったの？」

どうやら、笑うことだけは耐えたようだ。店長が平静を取り戻し、先を促すように疑問を口にした。それは、エドワードも知りたいことだ。主人に内緒で自分に会いに来たと聞いた瞬間、エドワードの胸を不安が過ったのだ。

フェリシアは自分のことを好いてくれているようだが、この少女は大切な主人のために自分に文句を言いに来たのではあるまいか。

「私は——」
わたし

少女の言葉を待ち、エドワードはごくりと唾を飲み込んだ。
「愛をお届けに参ったのです」

三話 配達業者【4】

愛？ フェリシアからの手紙でも受け取ってきたのだろうか？

だが、少女は、フェリシアに断りを入れていないと断言したばかりだ。

「うーん、なるほどね。そういうことか」

困惑するエドワードを余所に、店長は納得したように声をあげる。
「なるほどって、店長はわかったんですか？」

ルー達の時のように自分だけ蚊帳の外で、なんだか納得できない。エドワードは声に苛立ちが混じるのを感じた。店長はいつもの調子を取り戻したのか、悪戯を思いついた子供のような表情を浮かべている。

その表情に更に苛立ちを募らせかけて、だがそこで、エドワードははたと気が付いた。店長がこれだけ飄々とした態度がとれるのは、いつもある条件が揃った時ではなかったか。

「今日はフェシリアって子の温室に行ってきたんだろ？　じゃあ、もう予想はついたんじゃないのかい？」

店長の言葉に少女をじっと見つめ、エドワードは今朝の情景を脳裏に思い浮かべた。

燃えるような鮮やかな赤毛、そして生き生きとした緑の瞳――。

その？あか？と？みどり？を、エドワードは確かに目にした覚えがあった。フェリシアに案内された温室で、それは艶やかな姿を披露していたではないか。

「薔薇……」

意識せず唇からもれた呟きに、少女は嬉しそうに笑った。庭師に手伝ってもらいながらも、フェリシア自らの手で育てた、と言っていたあの温室の薔薇達――。彼女が彼の薔薇であるなら、姿が似る

のも頷ける。

「私は、ロージー。フェリシア様がお育てになった薔薇の精にわたくしございます」

ちよんつとスカートの裾を摘まんで、薔薇の精が頭こぶを垂れる。その姿はなんとも愛らしい。それを目にした店長が目を細め、口を開く。

「うーん、愛の配達人に相応しいねえ」

その賛辞に、薔薇の精はエドワードに向き直り、どこか誇らしげに姿勢を正した。

「それでは、エドワード様。私から、お伝え致します。この花ことはを——」

——あなたを愛しています——

薔薇の花ことば、それは愛の言葉だ。

エドワードは顔が熱くなるのを感じた。鏡をみれば、きっと顔を真っ赤にした姿がうつるに違いない。薔薇の精は、その様子に満足そうに目を細め、優しい声で言った。

「フェリシア様はあのように奥手な方。それでも、エドワード様に気持ちをお伝えするためにお育てになったのです」

「エドワードは本当に愛されているんだね」

店長が横槍を入れたが、エドワードは怒る気にはならなかった。綺麗な手を傷付けてなお、薔薇を愛おしそうに見つめるフェリシアの姿を思い出したからだ。

無性にフェリシアに会いたい気持ちが込み上げてきて、エドワードは声を張り上げた。

「店長！」

「あー、はいはい。今日はもうあがりでもいいよ」

察しのよい店長のお許しが出て、エドワードは黒いエプロンを脱ぎ捨てた。薔薇の精が再度、店長に頭を下げて踵を返す。その後を

追うようにカウンターを出たところで、

「あ、待って、エドワード」

と店長に呼び止められた。エドワードが振り返ると、店長がことりと音をたててカウンターに小瓶を置いたところだった。

「お土産だよ。持っていきな。蜜蜂達の集めた愛の味さ」
中^{ローズハニー}に詰まっているのは、甘い甘い薔薇蜂蜜であつた。

三話 配達業者（完）

三話 配達業者【4】（後書き）

今回は、ようやくエドワードが活躍できたかな。これにて、三話は完結です。

感想など、お気軽に残して頂けると嬉しいです。

*三話 設定裏話

三話「配達業者」

*エドワードとフェリシア

フェリシアの名前を決めるのには苦労しました。

貴族らしく響きも良い名前にしようとは思っていたのですが、なかなかピンとくるものがなかった……。そこで、エドワードの名前の由来をもう一度調べてみることにしたんです。すると、よいアイディアが浮かびました。そうして決まったのが「フェリシア」でした。

エドワードは「幸福の守護者」といった意味合いがあり、フェリシアには「幸運、幸福」といった意味合いがあります。（少し意識している部分もございますが……）

彼らの仲が温かなものであるように、願いを込めた名前です。

四話 迷子【1】

エドワードが妖精の尻尾で働き始めてから、かれこれ一月は経とうとしていた。寒さは深まり、季節は正しく冬である。

ほんの少し前まで、埃除けの布を被っていたストーブが、商談用のテーブルの対面ではちと音をたてていた。温められた空気で窓がほんのり曇っていたが、流れた水滴の合間から外の様子がうかがえる。

エドワードは商談用の丸椅子をカウンターに持ち込んで、そこにもたれ掛かるようにして通りを見詰めていた。家に居れば注意を受けるような座り方だが、少なくともここで誰かに見咎められることはないだろう。

現に店長は出掛けているし、朝から降り始めた雪のせいで客足も遠退いている。

店長は昼前に帰ると言っていたが、この雪ならもう少し遅くなるかもしれない。エドワードは一人時間を持て余して、舞い降りる雪を目で追っていた。

褐色の石畳の道を白い綿雪が覆っていく。ふわりふわりと舞い降りる雪が世界を白に包んでいた。まるで世界が白一色でできているような錯覚を起こしてしまいそうだ。けれど、そんな考えが浮かんだと同時に、エドワードの視界を青がかすめた。エドワードが目凝らすと、それは小さな人影であった。

大通りへ続く小さな路地から、ひっそりと身を乗り出している子供がいた。体格からして、エドワードより四、五歳下といったところだろうか。ここからは性別はわからないが、エドワードの目に留まったのは、子供が首に巻いている青いマフラーらしかった。

こんな雪の中、いったい何をしているのだろう。

エドワードが興味深げに観察していることも知らず、子供は腕に何かを大事そうに抱え、頻りに辺りを気にしている。忙しない首の

動きに合わせて、マフラーが揺れていた。

その青を自然と目で追っている、急にその規則正しい動きが止まった。路地からもう一つ人影が現れて、その子供にぶつかったのだ。子供はバランスを崩し、尻餅をついている。

そして、子供を見下ろすように立つ人物の髪が、雪に溶け込むようにして光っていた。

店長だ――。

エドワードがそう認識するうちに、店長は紺色のコートに包んだ身を屈めた。雪の上に倒れ込んだ子供に手を差し伸べ、助け起こしている。その後、二、三言葉を掛けているようだったが、子供に怪我がないことを確認したのだろう。

そして、子供が大事そうに抱えていた何かを拾ってやると、そのまま別れを告げ、こちらに向かい歩き出した。子供はそれを呆けたように見送っていたが、店長が道を横断したところで、何かに弾かれたようにその身を震わせた。

「待って！」

と子供特有の高い声が窓を挟んでも聞こえる。店長が足を止めゆっくりと振り返った。それを確認しないうちに、足元が悪いことも気にせず子供は駆け出した。先に店長が残した足跡に並んで、雪の上に転々と褐色の斑点が浮かぶ。

だが、子供が追い掛けてきたことを見てとって、店長は再びくると向きを変えた。

いったいどうしたというのだ。

そう思ったが、エドワードはその疑問を飲み込み席を立った。店長が窓越しに自分に向かってウインクしたのが見えたのだ。

そして、エドワードはドアに向かうと、二人を迎き入れるようにして、内側からそれを開いてやった。

四話 迷子【1】（後書き）

四話の連載を開始しました。

推敲の方は煮詰まっているので、もう少し寝かせてから行おうと思います。

資料の搜索も必要なので……。

四話はいつもとは少し違った趣になるかもしれませんが、最後までお付き合い頂けましたら幸いです。

四話 迷子【2】

「いやあ、今日はよく降るね」

肩に積もった雪を払いながら、店長は店の敷居を跨いだ。店の中の熱気溶けた雪が髪をほんのりと濡らし、いつもとは違う色を放っている。店長はそれを気にした様子もなく、コートを脱ぎながら後に続いた子供を見やった。

子供は開け放たれたドアの前で、敷居を跨ぐこともせずに立ち止まっていた。腕には大事そうに、三十センチ四方の鞆を抱えている。毛糸の帽子を被っているためもう少し小さいかもしれないが、身長は十二、三センチといったところだ。だがその身長に比べて、どうも子供の抱える鞆は大きすぎるように見える。

「寒いから入って来れば？」

洋服掛けにコートを掛けて店長が言う。コートを抜いてしまえば、シャツにベストという出で立ちだから、開け放たれたドアから流れ込む冷気は堪えそうだ。かくいうエドワードも、ドアを開けた後、そそくさとストーブの前に避難していた。

だが、店長の言葉に子供は困ったように店の中の二人に目を向けただけだった。寒さで赤くなった鼻の付け根に皺を寄せたかと思うと、くしゅんつと可愛らしいくしゃみを響かせる。鼻を吸って、それでも子供が中に入る気配はない。

それを見兼ねて、

「全く、早く入ればよいのに……」

と、呆れの混じった呟きと共に店長が子供の手を引いた。子供は大した抵抗もできずに、驚きの表情を浮かべたまま店の中に引き込まれる。その拍子に店のドアに身体が触れたのか、子供の後ろでドアが閉まってしまう。

そのまま、子供をストーブの前まで誘うと、店長はエドワードを見やった。

「エドワード、悪いけど温かい飲み物を準備してくる間、この子の面倒を見てくれるかい？」

エドワードが仕方なく頷くと、店長はちらりと子供に目を向けた後、二階へと姿を消してしまった。

店長が二階から降りてきたのは、それから五分ほどしてからのことだった。手にした丸盆に湯気のためマグカップを三つのせている。柔らかな香りの中に仄かに甘みが混じっていた。子供に気を遣ったのか、どうやらホットミルクらしい。どう接していいかわからぬまま、互いにだんまりを決め込んでいた子供を促し席についた。

以前ニーヤが出した椅子がそのままだから、椅子は丁度三脚ある。テーブルに盆を置いた店長が、エドワードがカウンターに持ち込んでいた椅子を引っ張ってきた。エドワードと子供を底辺にした三角形の頂点に身を落着けると、「どうぞ」とマグカップを配分する。その店長の動きに合わせて、子供は肩を震わせ、目をまるで満月のように大きく見開いた。その反応はどこか不自然である。なぜだか、店長の動きにばかり反応を示しているような気がする。

そのまま子供から目を離さずに、エドワードはカップの中のミルクを啜った。口の中に甘みと花の香りが広がる。以前配達してもらった蜂蜜を溶かしたハニーミルクなのだろう。

「寒かっただろう？ 話はこれ飲んでからでもできるから、ひとまず温まったらどうだい？」

店長の優しい言葉に、隣でそれを啜るエドワードをちらりと横目で窺った後、子供はカップを手を取った。そして、一口啜り――

「おいしい」

エドワードが初めてそれを口にした時と同じ言葉がもれた。それを聞いて店長が微笑む。

「愛情が溶かしてあるんだから当たり前だろ」

言ってから、店長はエドワードを見てさらに口角を上げた。からかいの混じった言葉にエドワードは目を逸らし、子供の方を向いた。

あつという間に子供が手にしたマグカップの中身は空になっている。音をたてて子供が空になったカップをテーブルに置くと、店長の意識が再び子供に向いたのがわかった。

「さてと、身体も温まったようだし、病院からわざわざ俺をつけて来た理由を聞いてもいいかな？」

つけてきた――？となると、先程、首を知りに動かしていたのは店長の姿を探していたからだだったのか。それなら、店長を見て子供がとる不振な行動にも納得がいく。

だが、エドワードにはもう一つ気になる部分があった。店長は「病院から」と言ったが、エドワードが初めて店長を見掛けたのも病院であるのだ。そうすると、店長は定期的に病院に出向いていることになる。定期的に医者に診てもらわなければならないほどの病気を煩っているのだろうか。だが、普段の飄々とした態度を思い浮かべて、エドワードは首を横に振り、その考えを打ちはらった。

「僕は光の精を探しにきたんです」

子供は考えを巡らせるエドワードをよそに、店長をまっすぐ見つめてそう言った。

四話 迷子【3】

「光の精？」

エドワードは思わずその言葉を繰り返した。これではまるで店長が光の精だと確信しているような言い方だ。店長も子供の考えを感じ取ったのだろう、一瞬きよんとした後、あはははは、と声をあげて笑った。

「それじゃあ、まるで俺が光の精だと言っているようじゃないか」

「と、とばけないでください。僕はちゃんと証拠だって持ってきたんですよ！」

エドワードとて、店長の正体が気にならないわけではない。実際、エドワードの願いを彼が聞き入れたと時に、彼の存在について問い質したことがある。その時は、うまくはぐらかされてしまったが、この店の在り方から店長もまた妖精なのではないか、と考えたことも一度や二度ではなかった。しかし、エドワードが店長に会ったのは病院であつたし、子供が店長にあつたのもまた病院であつた。妖精が病院に行くはずがないと思うのもまた事実だった。そして、何よりエドワードは真実を知ってしまうのが恐ろしかった。真実を知ってしまったえば、店長という存在がどこかに消えてしまうような気がしてならなかったのだ。

エドワードの心配など気にも留めず、店長はいつものように余裕たっぷりである。

「へえ、それはぜひ見せてもらいたいものだね」

店長の言葉に子供はむっとして、椅子の脇に置いていた鞆を手にとった。中を漁って出てきたのは左角を黒い紐で束ねられた紙束だった。その表紙には鳥籠を持った男の子と女の子、そして店長にそっくりな女とも男ともちかない人物が描かれている。その人物が着ているのは白いゆったりしたローブで、手にしているのは指揮棒に

似た小さな杖だった。

いかにも手作りといった趣が感じられるそれは絵本なのだろう。子供はどうやら、この絵本に出てくる光の精が店長であると思っているようだ。絵本の挿絵にそっくりだからなんて、幼い子供らしい安直な考えだ。これでは証拠とは言えないだろう。エドワードが店長の顔を窺うと、案の定店長は眉を寄せていた。店長は一つ息を吐くと肩をすくめ、本とは言い難いページをぱらぱらとめくった。エドワードもつられて覗き込む。最初の数枚を見た限りでは、兄と妹が光の精の力を借りて幸せの鳥を探しに行く冒険物語らしい。それにしても、物語の中の光の精は店長によく似ている。エドワードが再び店長の顔を窺うと、彼はその物語に何を感じたのか、優しい笑みを浮かべていた。そつと本をテーブルに戻すと、店長は口を開いた。

「君は光の精に会って、どうしたかったんだい？」

先程までのからかいの色はなく声音は柔らかい。その対称的な態度に子供は訝しそくに目を泳がせた。

それを見て店長は目を細め、

「場合によっては、俺は君の光の精になってあげるよ」と言った。

四話 迷子【4】

「本当に、本当？ 僕と一緒にしてくれるの？」

目を瞬かせ子供が言う。

「君の理由次第でならね」

「店長！」

店長の思わぬ言葉に声を上げると、エドワードの足をテーブルの下で店長が蹴り上げた。足に走った痛み、エドワードは唇を噛んで言葉を飲み込まざるを得なかった。苦汁を飲んだようなエドワードとは対称的に、子供は嬉々として目を輝かせる。

「理由なんて簡単さ。母さんも父さんも生まれたばかりの弟にかかりつきり。だから、僕は僕だけの幸せを探しに行こうって決めたんだ」

エドワードは痛みをやり過ごしながら、自慢げに言う子供を見つめ、それは違う、と思った。エドワードにとっては父と母、そしてフェリシアと共にある生活こそが幸せだ。最近はその店長や不思議なお客達も加わるようになったが、家族は昔から変わることのない幸せの象徴だった。そして、自惚れではなく純粹に両親にとっても自分は幸せの象徴だという自覚もあった。

「そうということか……」

店長の呟きが耳に入る。

「じゃあ、俺が君を連れて行くべき場所は決まったよ。準備をしてくるから少し待っていてくれるかい」

そう言って店長はカップを丸盆に戻し、それを手にして席を立った。

「待ってください、店長！」

エドワードも慌てて立ち上がりその跡を追う。店長は振り返ることなく、階段に足を掛けていた。階段を上りきったところでようやく追いついたエドワードは、とっさに店長の腕を掴んだ。

「あなたは本当に光の精だということですか？」

背を向けたまま店長が口を開く。

「……違うよ」

不可思議な間があったが、それでも店長は否定の言葉を口にした。
「じゃあ、なんであんなこと言っんですか」

その言葉に店長はゆっくりと振り返った。自然と店長の腕を掴む
手に力が入る。

「エドワードはあの子の言い分をどう思った？」

「……僕には理解できません。きっと、家族と共にあることがあの子にとっての幸せではないでしょうか？」

「俺もそう思うよ」

そう応えた店長の表情は、穏やかであったがどこか哀しそうでもあった。その表情にエドワードは言葉が出てこない。しかし、エドワードが言葉を見つけるより早く、店長は手にした丸盆をエドワードに押し付けた。エドワードが思わず両手でバランスを取った隙に、店長はその横をすり抜ける。

「心配しなくてもいいよ。俺はあの子を両親のもとまで送って行くだけだ」

階段を駆け下りて行く店長の後ろ姿を、呆然と見送りながら、エドワードの胸を言い知れぬ思いが過った。

子供の大きな笑い声と共に店のベルの音がして、階下の気配がふと消える。その思いを言葉にできないまま、盆を床に置きエドワードは冷たい階段に一人座り込んだのだった。

五話へつづく

五話 待人【1】

どのくらい時間が経ったろうか。指先や足先はすっかり冷えきつて、感覚が乏しい。それでもエドワードはその場を動く気にもなれず、ただぼんやりと階下へ視線を落としていた。

だが、暫くして、階下で鳴ったベルの音に肩を震わせた。

店長が帰ってきたのだ――？思わず出た安堵の溜息と共に、エドワードは盆を置き去りにしたまま階段を駆け下りた。

「店長！」

薄暗い階段から明るい店先に出たことで、相手の姿は黒い影のように見える。それでも、体格からいって店長でないことが見てとれて、エドワードは続くはずだった言葉を飲み込んだ。身長は店長より十数センチ小さいだろう。目が慣れてくると、その人物の容姿がくつきりと浮かび上がってくる。紺色に近い青を溶かしたような黒髪とエメラルド色の瞳が特徴的な、エドワードより三、四歳は年上の男の子だ。彼は、この寒い中薄手のコートを一枚着ただけの格好で立っていた。

エドワードは相手の姿を確認して、慌てて取り繕うように背筋を伸ばした。

「いらっしやいませ」

エドワードが落胆を隠すように馴染んだ言葉を口にすれば、相手は驚いたように目を瞬かせた。

自分は何か相手を驚かせるようことをしたのだろうか。可能性があるとするれば、相手よりも年下のエドワードが接客に現れたことだろう。上流階級の子弟を除くと、エドワードくらいの年齢で働くこ

とはそう珍しいことでもなかった。その事實は世間一般では当たり前のことであつたが、恥ずかしいことにエドワードがそのことを知つたのはこの店で働き始めた頃だ。相手がエドワードと同じような育ちであるなら、そのことに驚きを感じても不思議ではない。

しかし、そこで氣になつてくるのは相手の出で立ちだった。

仕立てがよいのは見て取れるが、こんな真冬に着るにしては些か輕装過ぎる。表に乗り物を待たせている様子もないので、その輕装でここまで歩いて來たのだらう。しつとりと濡れた髪は元々癖毛なのか、耳の上で波打っている。

氣がつくと、エドワードが困惑氣味に相手を觀察しているのと同じように、彼もエドワードに視線を向けていた。互いに頭の上から足の先まで順に視線を巡らせていく。

足先までいった視線が再び上を向く瞬間に、視線が交叉した。氣まずさに足先に再び視線を落とすと、相手が動く氣配がする。

「お前、何者？　ここで何をしてるんだよ」

と、独り言のように投げやりに呟かれた言葉は確かに問い掛けの形をとっていた。その質問に対する答えは一つしかない。しかし、それすら否定しているような問い掛けに、

「僕は、この店の店員です」

とエドワードは絞り出すように言葉を音にした。それを聞き、ふーん、と相手は唇を尖らせて目を細める。明らかにエドワードが店員であることを認めていない態度だ。

「まあこの際仕方がない。ともかく、店長を呼んできてくれよ。地下か上にいるんだらう？」

その物言いに眉をひそめつつ、エドワードは事實を返した。

「店長は、今留守にしています」

その言葉に相手は、使えないとでも言いた氣に深い溜息を吐いた。溜息を吐きたいのはこちらのほうだ。エドワードが思わず息を吐きかけた――？その時、

「つくづく、間が悪いなあ、兄貴の奴……」

相手が不満そうに漏らした言葉に、一瞬にして身体が強張ったのがわかった。

兄貴——というのは店長を指すのだろう。言葉からは親しみの情が滲み出ている。聞きようによっては、ルーとアリーの夫妻やニヤ以上に砕けた態度である。

「まあ、いいや。帰ってくるまで待たせてもらうぜ」

彼は当たり前のように備え付けの丸テーブルに腰を下ろした。そして、とんとんと指先でテーブルを叩いてエドワードを呼ぶような仕草して、

「あー、そうそう。飲み物はミルクティーで、ついでに塩バタークッキーも頼むな」

と、エドワードの答えも待たずに彼は足を組んだ。先程の発言に次いで、その横柄な態度にエドワードは眉を寄せたが、店長と親しそうな様子から言つてルー達のように毎日訪れるわけでないにしろ、常連客と言つてもよいのだろう。そうすると店長の留守中に無碍に扱うわけにもいかない。渋々エドワードは彼の要求を叶えようと動き出した。

だが——

「そいつの要求など聞いてやる必要はないぞ」

乱暴にドアを開ける音と共に店に響いた聞き覚えのある低重音に、エドワードはすぐさま店の入口を振り返った。

五話 待人【2】

「ルーさん！」

いつものセーターの上に前ボタンを留めることなくコートを羽織ってルーが立っていた。

そういえば、雪の影響からなのか、今日の来店はまだであつたな、とエドワードは納得する。そして、ふてぶてしい先客よりも馴染み深いルーの登場にほっと息を吐いた。

これなら、先客の接客よりもルーの接客を優先しても仕方がないだろう。そう自分に言い聞かせ、エドワードはカウンターを出て、ルーを迎える言葉を口にしようとした。しかし、予想に反してルーは肩に積もった雪を払うと、椅子に腰かけている先客へと足を向ける。

エドワードは慌ててその後を追ったが、次にルーが取った行動に声を張り上げた。

「何をするんですか、ルーさん！」

エドワードが止める間も空しく、ルーは先客の胸倉を掴んでいた。ルーはエドワードを一瞥すると、「少し黙っていてくれ」と言つた。その声は決して大きなものではなかったが、有無を言わせぬ力があった。

「ちゃんと立て」

ルーは椅子から先客を引き摺り下ろすと、自分の目の前に彼を立てた。気だるげな態度の彼はちっともルーの方を見ない。

「どうした？ お前は挨拶も碌にできないのか？」

苛立ちを隠そうともせずにルーが放つた言葉に、やっと彼は顔を上げ、乱れたシャツの襟元を直した。

「相変わらず、ルーグの旦那は乱暴だな。そんな態度だと、アリーに愛想をつかされるんじゃないのか？ まあ、そうなってくれた方が俺としては有難いけど……」

「いくらお前が私達の仲を阻もうが、そんなものは大した傷害にはなりはしない」

「旦那の口から惚気を聞く羽目になるとは……。なんで今日に限ってこんなに遅い御出ましなんだよ」

「それは、お前が連れてきた客人のせいだろ」

「ちらりと雪の降りしきる外を見やってルーが眉を顰めた。だが、ルーの言う客人と思わしき人影をエドワードは見つけることができなかった。

それでも、目の前の相手は思い当たる節があったのだろう。

「あー……」

と曖昧に言葉に成りきらない呟きを漏らした。それがルーの苛立ちを更に募らせたのか、ルーは更に眉間の皺を深くする。

「だいたい、何だ。暫くお前の顔を見なくて済むと喜んでいたのに」そこでルーは言葉を区切り、後方に控えるエドワードに目をやった。

「客の振りをしてエドワードを困らせるなど、いい加減にしろ」

「いやあ、初々しい店員を見てたら、つい……」

「お前は、そう、いつも、いつも——」

と、ルーの顔が段々と怒りで赤くなっていく。

一方で、その遣り取りの一部始終を見ていたエドワードは、自分の話題に困惑の表情を浮かべていたが、湧きあがってくる疑問を抑えきれず話に割って入った。

「ちよつと待つて下さい。客の振りってどういうことですか」

「そのままの意味だぜ。だって、俺は客じゃないしな」

悪戯が成功したとでも言いたげに笑う相手に、頭に血が上ってくるのがわかる。エドワードの表情の変化に気付いたのか、相手はエドワードを制するように両の掌を身体を守るように構えた。

「おっと、どうして騙したんだってというのはなし、な。お前が勝手に勘違いしただけだし」

その物言いにごんつと鈍い音が響く。見れば、相手は頭を押さえ

て顔をしかめていた。その原因をつくつたのはルーだ。身長差を利用して相手の脳天に拳骨をお見舞いしたのである。

「まったく、素直に謝罪ぐらい口にしろ」

「何だよ、ルーグの旦那には関係ないだろ」

恨めしそうな呟きに、それでもきっぱりとルーは言った。

「エドワードを騙してちゃっかりお茶を要求していた以上、見過ごすわけにはいかん」

ルーが自分のために怒ってくれているのだという事実には、エドワードは頭に上った血が引いて行くのを感じた。初めて会った時は、威圧的な印象しか抱けなかったルーだが、今は心底頼もしい。

「ありがとうございます、ルーさん」

素直に音になった言葉に、ルーは相手を睨みつけていた目をエドワードに向け、目元に加えていた力をやんわりと解いた。

「本当に礼義正しいな。この悪戯坊主に爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだ」

「俺は爪の垢なんて不味いもん飲まないぜ」

すかさず相手が反論するも、ルーは気にも留めずに受け流している。

だが、エドワードはルーの口にした『悪戯坊主』という言葉に引っかかりを覚えていた。以前もルーは『悪戯坊主』という言葉の口にしていたことがあった。その人物をエドワードは今のところ一人しか知らない。

「ルーさん、彼はもしかして……」

「ああ、そうか。紹介はまだだったな。こいつはデイルン。認めたくないだろうがお前の先輩店員だ」

五話 待人【2】（後書き）

というところで、五話でようやくディランが登場です。

五話 待人【3】

「あなたが……」

ルーの言葉にぽかんと口を開け、エドワードはディランを見た。
「よろしくな」

とディランは歯を見せて笑う。その行為にルーは当然のように眉間に皺を寄せたが、ディランは気にせずエドワードに近づくと、その手を取り、力強く握った。そして、エドワードの耳元に顔を寄せ声を潜めて、

「俺は、いつもアリーと旦那の邪魔しているようなもんだから、旦那はいつも俺には敵しいんだ。まあ、根が悪い人ではないから嫌いにはなれないんだけどな」

と彼らの関係について教えてくれた。エドワードは、悪戯好きとはいえこの人も根は悪い人ではないのだろうな、と思う。彼はルーとアリーの邪魔をしているというが、それも何か理由があつてのことなのだろう。

「で、お前は、店に何をしに来たんだ？」

声を潜めていたにも関わらず、ディランの言葉はルーに聞こえていたのかもしれない。こほんつという咳払いの後、ルーがその場を取り繕うようにして口を開いた。エドワードのもとからディランの身体が離れる。

ディランの行動には、エドワードとて疑問に思う部分がある。店長からは、ディランは春先まで店に来ることはないと聞いていたのだ。先程来店した時のディランの言葉が真実ならば、彼には店長に会わなければならない理由ができたことになる。

「なんだい、旦那、俺が店に来ちゃいけないっていうのか」

「そうは言っていない。しかし、今、お前は北からのお客を迎えている大事な時期だと記憶している。優先すべき事柄は明白だろう。店に出てくる暇などないだろうに」

ルーの言葉に、ディランはわかっていないな、とでも言いた気に肩を竦めた。

「俺だつて馬鹿じゃない。優先すべき事くらいわかってるさ。だから俺は真つ先に店長に会いに来たんだ」

何やら雲行きが怪しくなつて来た。そうエドワードが感じるくらいだから、ルーもディランの言葉の意味を理解したのだろう。ルーが口にしたのは先を促す言葉だ。

「何があつた」

ディランは、ルーとエドワードを交互に見やり、話していいか迷っているようであつた。しかし、やがて決心したように口を開いた。「昨日遅れてやってきた客人の一人を北の海まで迎えに行つて来たんだ。彼女が知らせてくれた。妖精王が代替わりするらしい」

その言葉の意味がエドワードにはわからなかったが、ルーが息をのんだことから重大性だけは感じ取ることができた。

五話 待人【4】

やがて、一瞬言葉を失っていたルーが弾かれたように口を開く。

「確かなのか？ そんな話まだどこから聞いた事がないぞ」

「俺だつて始めは耳を疑ったさ。でも、他ならぬ冬の精がはつきりとそう言っただぞ」

デイルンの言葉に「冬の精がそう言ったのか」とルーは押し黙ってしまふ。しかし、エドワードにはやはり意味がわからなかった。

「待ってください。妖精王とか冬の精とか僕には全然わからないんですが」

ルーは思考に没頭しているのか、エドワードの問いには応えてくれなかった。

代わりにデイルンが、溜息を吐く。まず、そこから説明しなければならぬことが億劫そうだ。それでも、エドワードは引くわけにはいかなかった。エドワードは、妖精のこと―？ 店長が知っているであろうその世界？ -を全くと言ってよいほど知らない。そのことにエドワードは言い知れぬ不安を感じるのだ。

「妖精王っていうのは、言葉通りさ。妖精の王様のこと。そして冬の精は今俺のところに招いている客人達のことだ。彼女達はここから遙か北の国々まで流水に乗ってやってくる。彼女達を迎えこの国に招き入れるのが俺の役目。だから、一番に俺のところにその知らせが入ったんだよ」

「王様と言つても、店長はルーさん達がご長寿ナンバーワンって言っていましたよ。ルーさん達以上にすごい存在が他にいるんですか？」

人間の王侯貴族が長い時を経て血を守ってきたように、王と聞いてエドワードが思い浮かべたのは歴史ある血脈であった。その点か

らいうと、ご長寿ナンバーワンであるルー達は最も血の濃い存在といえる。

「確かに、ルー達は長生きてしている分、長老として敬われているな。だが、妖精にとって血が必ずしも重要ではないんだぜ。妖精はいのちと共にあり、いのちの繋がりを大事にするんだ。だから妖精王は生命を司る存在でなければならない」

そこでデイランは言葉を区切った。デイランは、人間であるエドワードにどこまで言っているのか言葉に詰まっているようでもあったし、言葉を選んでいようでもあった。

それ自体は別段気に留めるほどのことではなかったが、不思議なことに彼はその後、ぐるりと店内に視線を巡らせた。そして、彼が視線をとめたのは、店の奥に備え付けられた古びたカウンターだった。デイランは、カウンターを目に焼き付けると何かを思い出すように目を閉じた。

きつと、店長のことを考えているのだ。

エドワードには、彼がその瞼の裏に思い描いている光景がわかるような気がした。それがわかることがエドワードには誇らしかったが、デイランと店長の絆を見せつけられているようで、もやもやと渦巻く不安は晴れない。

「その妖精王の代替わりが店長に関係があるんですね」

エドワードの言葉に、閉じられていたデイランの瞼が微かに震える。それからゆっくりと瞼を上げ、そのエメラルド色の瞳でエドワードを真っ直ぐに捉えた。その瞳の中ではゆらゆらと感情の色が波打っていた。

「お前は人間だよな……」

デイランの声は小さかったが、エドワードの耳には、はっきりとした音となって届いた。その理由は、エドワード自身が最もよくわかっている。

ルーやアリー、ニーヤやデイラン、店長をよく知る者達は皆妖精なのだ。そして、自分だけが人間である。

ディランの言葉はまるで、そのことを責めているような気さえする。

それは、完全に被害妄想であることはわかっている。それでも、胸の内から沸き起こってきた苛立ちを吐き出すようにして、エドワードはその皮肉を口にした。

「そういつあなたは妖精なのでしょう？」

エドワードの言葉に意外なことにディランの瞳の中に悲しみの色が浮かぶ。

「そうさ、俺も妖精だぜ。名が表す通り、海の精なのさ」

海と言われ、エドワードが思い浮かべるのは穏やかな波の音とどこまでも続く深い青だ。そして、その青が描く地平線には、日が昇り、日が沈む。そう考えると昼と夜の夫婦の片割れであるルーがディランを嫌っている理由もわかるというものだ。

そう冷静に考察しかけて、エドワードは首を振った。今は彼らの関係性について考えている場合ではない。

だが、そのおかげで、高まっていた感情が落ち着いてきたのも確かだ。

「あなたは、人間がお嫌いですか？」

「そんなわけではない！」

エドワードの問いに、ディランは即答した。張り上げられた声に、ルーが訝し気な目を向けている。

「この店の店員をしているなら知っているだろ？ この店は妖精と人間双方を繋ぐ場所だぜ。でも、妖精皆が人に友好的なわけじゃない」

産業革命以前、この国は妖精文化と常に共に歩んで来た。しかし、産業革命以後、科学や文化の発展と共に妖精達は忘れ去られ、今では彼らの存在を信じる者は少ない。そんな中で尚も存在するこの店の意義??そして、妖精達から見た人間とはいったいどんな存在なのだろう。

エドワードにとっては考えてもみなかったことだ。

エドワードは不安そうに妖精二人に目を向けた。ルーがディランの言葉を引き継ぐ形で言葉を続ける。

「だからこそ、意図せず争いに巻き込まれる可能性だってあるのだ。ここは、ひどく脆く不安定な存在なのだからな」

「新しい妖精王は、この店をおとり潰しに？」

「わからない。だが、少なくとも今私が言えるのは、彼はアルヴィンのことは認めているが、この店のことを認めているわけでないということだ」

妖精の尻尾が無くなってしまいかもしれない。その事実、ディランの存在以上にエドワードの不安を掻き立てたのだった。

五話 待人【4】（後書き）

ということで、店の存続の危機？

六話 店長【1】

エドワードの不安を掻き立てたやりとりの後、ルーはこの知らせを妖精達なかまに知らせるために、早々に店を出ていつてしまった。

ルーの旦那に掛かれば一日で、世界中の妖精達なかまに知らせが届くだろうな、と言つて彼を見送ったディランは、今は椅子に座り、今朝エドワードがそうしていたようにテーブルに頬杖をついている。

エドワードは、結局ディランと二人で店長を待つはめになつてしまったのである。しかし、子供を送つて行つた当の店長は、一向に帰ってくる気配がない。

病院はここからさほど遠くない所に位置しており、大通りを西へ、大聖堂の丸い屋根を目印にして歩いて行けば、子供の足でも三十分は掛からない。子供を送り届けるだけであれば、一時間もあれば事足りる。それでも、店長が帰ってくる気配がないのは、おそらく子供の両親にでも引き止められているからなのだろう。

店長が帰つて来れば少しは不安を拭えただろうが、不安を抱いたまま、エドワードはディランが腰かけている商談用のテーブルの向かいに腰を下した。

すると、ディランが思い出したように口を開く。

「なあ……」

極力目を合わさないようにしていたエドワードは、掛けられた声に少々意識を向けた。その動きに合わせて、椅子が嫌な軋みを上げる。

「何でしょうか」

エドワード自身、その声音が決して相手に良い印象を与えないだろうことは予測ができた。しかし、それでも、その気持ちを隠すことはできない。ディランもそれを感じて、眉を寄せたが、そのことに触れようとはしなかった。代わりに、右腕一本で頭を支えた状態でエドワードを見詰め、言葉を続ける。

「お前は、どうして兄貴のもとで働くことになったんだ？」

言われて、エドワードは店長との遣り取りを思い出した。

「ディランさんがお休みしている間の手伝いが欲しかったからではないでしょうか」

最初、エドワードは、店長に頼んだものに見合った額を支払うつもりだった。しかし、金の代わりに店長は労働力の提供を求めたのである。その理由として、エドワードが考え付くのは、ディランのことしかあり得ない。だが、当のディランはエドワードの考えを否定した。

「違うな。俺は今まで毎年この時期に休みを取ってきたけど、一度として兄貴が俺の留守中に他の奴を雇ったことはなかったぜ」

「だったら、どうして店長が僕なんかを雇ったと言うんですか」

こういつては何だが、エドワードはお坊ちゃん育ちである。このような店で働いたことなどないし、雇ったところで戦力になるとは思えない。だからこそ、エドワードは、ディランが抜けた穴を埋めるために、気休め程度でも労働力が欲しかったのだという考えに至ったのだ。

訝しそくに目を細めたエドワードに対して、ディランもまた困ったように苦笑した。

「そう突っかかるなよ。きっとお前は兄貴に気に入られるようなことをしたんだ、と俺は思うぜ。思い当たる節はないのか？」

思っても見なかった返答に、エドワードは目を瞬かせる。思い当たる節というほどではないが、もしディランの言葉が真実なら思いつく出来事は一つしかない。

エドワードが店長と知り合う切欠となった出来事、まさにそれだ。しかし、あの日あったことを、エドワードはあまり思い出さくはなかった。店長との出会いは確かにエドワードにとって宝といえるものであったし、その事だけをとってみればよい思い出である。だが、あの日のような思いはもう懲り懲りだという気持ちも心の内に強くあった。

それでも、心のどこかに引っかけりを覚える部分は確かにある。そう感じてエドワードは、自らの胸にそっと効き手を添えた。掌を通じて、不安に脈打つ鼓動が伝わってくる。

そういえば、今店長を待ちながら感じている不安は、あの日抱いていた不安に似ている。これは、何かを失いそうな時に抱く、限らない恐怖だ。その考えに至った時、エドワードの思考はもう既に、あの日の出来事へと向いていた。

六話 店長【2】

その日は、秋の香りのする日だった。夏のまばゆい光と熱さが過ぎ去り、庭先の落葉樹がほんのりと色づき始めたそんな秋の日だ。

エドワードはその日、母の提案でロンドン動物園に出掛けることになった。普段、一日の大半を家で過ごすエドワードの母が、その日ばかりは外に出掛けることを望んだのだ。

元よりエドワードの母は外出が好きだった。馬車の車輪の音を聞き、伝わる振動に身を任せながら、流れる景色を見るのが取り分け好きだったのである。病を患ってから、外出は控えるようになっていたのだが、その日ばかりは爽やかな秋空に誘われたのだろう。

エドワードの母は使用人に馬車を用意させ、エドワードのエスコートを受けロータリーに横付けされた馬車へと乗り込んだ。母が乗り込んだのを確認して、エドワードも使用人から受け取ったバスケットを大事に抱え、それに続く。バスケットの中身は、使用人に作ってもらった弁当と母の発作用の薬だ。そして、二人が乗り込んだのを確認して、御者がドアを閉めると、馬の嘶きと共に、蹄の音と車輪の音が軽快なリズムを刻み始めた。

ロンドン動物園は、バッキンガム宮殿近くのエドワード達家族が住む一等地からは北東に位置している。馬車を使えば一時間は掛からない距離だ。その小さな外出は、エドワードにとっても、エドワードの母にとっても久方ぶりのことで二人の心は躍っていた。

だが、その楽しい気持ちは最後まで続かなかったのである。それは、昼食の席での出来事だった。

動物園に隣接した公園内で、芝生の上に大きな布を敷き、バスケットを広げたまさにその時、うっと呻き声がして、エドワードが振り向けば、胸を抑え、芝生の上で苦しそうに身を丸めた母の姿があった。顔色が悪く、呼吸もかすれたように尾を引いている。そのように苦しそうな母の姿をエドワードは、屋敷で一度だけ目にしたこ

とがある。発作だ。エドワードがそう結論付けるのに時間は掛からなかった。エドワードは、震える手でバスケツトの中から薬を取り出し、母にそれを飲ませた。粉末状のそれに咳き込みながらも、エドワードの母の喉元は確かに上下する。それによって、母の呼吸は大分落ち着いたように見えた。しかし、以前として顔色は冴えず、母を励ますように握った手はいつもより冷たいような気さえする。そう感じた瞬間、エドワードの胸に不意に恐怖が浮かんた。

その恐怖に駆られるままに、エドワードに手に力がこもる。握った手を通して伝わった力に反応して、母の口から呻き声が漏れた。エドワードはその声に、はっとして、声を張り上げた。

「母さん！ 母さん！」

そのエドワードの声を聞きつけていつしか周りには人垣ができていく。けれど、人々は遠巻きに様子を窺うだけで、手を差し伸べてくれる者はいない。エドワードのなかで、不安と苛立ちが膨らんで、涙が込み上げてきた。エドワードは鼻をすすり、それに耐えようとしたが、視界がぼやけるのは防ぎようがない。母の手を握るのとは反対の手で目元を拭うと、その間に、何やら人垣のなかでざわめきが起こった。何事かと、エドワードがいまだにかすむ目を向けると、人垣を掻きわけて、一人の青年が姿を現したところだった。青年のプラチナブロンドの髪が目眩しかった。その髪色自体は珍しいものではなかったが、彼の印象的な董色の瞳には覚えがあった。以前、出掛けた折に母の薬を受け取りに病院に寄ったことがある。そこで、母の担当医と彼が話している姿を目にしたことがあったのだ。

彼はその時のように、エドワードと目が合うとふっと微笑んだ。そして、そのままエドワードの隣までやってくると、身を屈め、「大丈夫」とエドワードの肩を叩く。その一言に感情のたがが外れ、エドワードは堪えていた涙が溢れ出してくるのを感じた。

「母さんを、助けて……」

辛うじて、嗚咽を堪えながら、エドワードが言葉をしぼり出すと、彼は再度「大丈夫」と言う。そうして、彼はエドワードの母の傍ら

に膝をついて、懷から小さな布袋を取り出した。それはエドワードの母が指輪を閉まつている小さな宝石箱ぐらいの大きさで、その中から出て来たのは親指の爪ぐらいの大きさの七色に光る石だ。

彼はその石を、何の迷いもなくエドワードの母の口元へと運んだのである。

これにはエドワードも驚いた。

「母にその石を飲ませる気ですか！」

涙を流しながら茫然と男の仕草を見守っていたエドワードは、慌てて男の腕にしがみつく。だが、彼はそれを交わして、その石を母の口の中へと押し込んでしまった。

「安心して。これは石ではなく、薬を水飴で溶いて固めたものさ」

エドワードが半信半疑で母の様子を窺っていると、彼の言葉を証明するように、母の顔色が回復してくる。

母の手を通じて伝わるぬくもりに、エドワードはどっと身体の力が抜けるのを感じた。

「よかった」

エドワードがもらした言葉に、青年は優しい頬笑みを浮かべる。

「君は良く頑張ったよ。だけど、安心するのは早い。一応、医者に見せた方が賢明だと思うよ」

彼の言葉に、続いて人垣の中から声があがった。

「今、医者呼びに行っている奴がいるから、そのままそこに寝かせておいた方がいい」

どうやら、エドワードが無情に感じた人々は、冷静な対応をしていたらしい。彼らに苛立ちを覚えた自分を恥じながらエドワードが青年を見やれば、彼はその言葉に肩を竦めて見せたところだった。

「じゃあ、俺の役目はここまでだね」

そう言つて青年はその場を去ろうとする。人垣を形成していた人々も、事が収まる兆しを見せたことで散り散りに自分の居場所に戻ろうとしていた。しかし、彼らと同じように背を向けた青年を、エドワードは慌てて呼び止めた。

「待つてください。お礼を。お礼をさせてください」

「別に、俺はお礼が欲しくて助けたわけではないよ」

「でも、それでは僕の気持ちが収まりません」

そう言つて、エドワードが敷物の上に置かれたままの母のハンドバックから小切手を散り出すと、青年は怪訝そうに眉を顰めた。

「必要ない」

「しかし……」

尚も食い下がろうとしないエドワードに、青年は溜息を吐く。心底呆れているようであったが、エドワードとてお礼もせずには納得できるものではなかった。青年は何事か思いを巡らせるように空を仰いだ。その様子に、エドワードが訳もわからず涙の乾いた目を瞬かせる。すると、青年は芝生の上に横たわる母の姿とエドワードを順に見比べ、にこりと笑った。

「よし、ではこうしよう。俺と一つ契約をして欲しい」

「契約ですか？」

「そう、俺はお金いらない。そのかわり、君にしばらくうちの店で働いて欲しいんだ」

六話 店長【3】

エドワードはそこで回想を終え、息を吐いた。以上が、エドワードがこうして妖精の尻尾で働いている切欠であった。その後、エドワードの母は医師の診断により数日の安静を言い渡され、その隙を見て、エドワードは契約通り、彼の店で働き始めたのだ。店長が契約内容を両親に伝えることを拒んだため、勿論エドワードが働いていることは秘密である。しかし、全てを秘密にしておく訳にもいかず、エドワードは家ではあの出来事が切欠で知りあった『友』の元に毎日遊びに行っていることになっている。両親は、エドワードに『友』ができたことを喜んだし、母を助けた行動から彼が博識な良家の子息だと結論付けていたので、エドワードが家庭教師の授業をさぼって出掛けて行くのも大目に見てくれた。そして何より、エドワードは、いつもは飄々（ひょうひょう）としている店長のことを、態度に現さないまでも尊敬している。その店長が、本当に自分のことを気に入ってくれているのだとすると、嬉しいことに変わりはない。しかし、今思い返してみても、店長に気に入られる要素がどこにあったのかわからない。

それでも、傍らでエドワードの話を聞いていたディランは納得したように手を叩いた。

「なるほど、な。兄貴が、お前を店に迎えるわけだ……」

「一人で納得しないでください。僕にはさっぱりわかりません」

エドワードが唇を尖らせて、恨めしそうにディランを見やると、

「お前は、兄貴に似ているんだよ」

とディランは尚更わけのわからないことを口にする。

「僕が？ 店長に？」

エドワードは確かに店長を尊敬しているが、ディランの言葉からは褒められているような感じはしない。むしろ、そこから感じられるのは、どこか寂しそうな色だ。それはすなわち、自分の知り得な

い店長の秘密が関係しているのだろう、とエドワードは思う。

「あなたは、何を御存じなのですか？」

「お前が聞きたいことの多くを……」

「だったら、教えてください。僕だけ知らないのは不公平だ」

エドワードは、テーブルを倒さんばかりの勢いで身を乗り出したが、デイルンは首を横に振った。

「それは俺から話すべきことじゃない」

「なぜですか？」

「お前が、兄貴の友でありたいと望むなら、兄貴自身がお前に話して聞かせるべきことだ」

そこで、デイルンはふいにエドワードから視線を外し、

「なあ、そうだろ、兄貴？」

と店の入り口へ目を向けた。

ちょうど店の入り口を背に、デイルンと向かい合わせで座っていたエドワードは、その言葉に、テーブルに手を突き、反射的に立ち上がった。足にぶつかりバランスを崩した椅子が、木製の床に倒れ乾いた音を挙げたが、エドワードには気にする余裕はない。ドアを振り返ったエドワードが目にしたのは、髪を雪でしつとりと濡らした店長の姿であった。どうやら話に気を取られるあまり、ドアに備え付けられたベルの音に気付かなかったらしい。

デイルンとの遣り取りをどこまで聞かれたのかわからなかったが、エドワードは言うべき言葉が見つからずに、唇を噛んだ。沈黙のままじっと自分を見据える店長の目に、居心地の悪さを感じて、エドワードはそのまま俯いた。けれど、離れて立っていたはずの気配が近付いてくるのを感じて恐る恐る顔を上げる。手を伸ばせば届く距離に店長がいる。

「店長……」

エドワードが思わず呟けば、いつもの態度、いつもの声音で、店長が口を開く。

「帰りが遅れてすまなかったね。帰り際に、知り合いの医師に^{せんせい}つま

ったものだから。留守中変わりはなかったかい？」

そのいつもと変わらぬ態度が、エドワードにはひどく堪えた。まるで、それ以上関わることを許さないような感覚さえ覚えてしまう。それでも、そこでそれを認めてしまえば、知る機会を失ってしまうのは明白だった。エドワードが不安そうに、後ろのディランを見やれば、彼はエドワードを励ますように強く頷いた。それが後押しになって、エドワードは言葉を選びながら口を開く。

「ディランさんが、知らせを持ってきてくれました。妖精王が代替わりするから店が潰されてしまうかもしれないと。でも……」
「でも？」

「それ以上に、僕は不安なんです。僕が店長のこと、この店のことを全然知らないのだということを知りました。ディランさんが知っていることを僕は知らない。店が潰されてしまうかもしれない時に僕にはなにもできない。僕には、僕がここにいる意義がわかりません」
最後の方を早口に言い切って、エドワードはぎゅっと拳を握った。こうしないと、感情のたがあの日のように外れてしまいそうだ。店長は真っ直ぐにエドワードを見つめて視線を外そうとしない。それが辛うじて、エドワードの感情の決壊を抑え込んでいるようでもあった。

そのまま視線を交差させ、エドワードは店長の言葉を待った。

「ディランが、エドワードは俺に似ていると言っただろう？」

その言葉に反応して、後ろでディランが動く気配がする。それに釣られて先程ディランが口にしてた言葉を思い出し、エドワードは頷いた。店長は随分前から、ディランとの会話を聞いていたらしい。そんなことを思いながら、エドワードは素直な思いを口にする。
「でも、僕には自分が店長に似ているなんて思えないんです」

「……エドワードがそう思っているだけさ。実際、エドワードは俺に似ているよ。だからこそ、俺はあの日、エドワードを助けたんだ」
店長自身の口から語られたその言葉は、エドワードにとって、思ってもみないものであった。

六話 店長【4】

店の看板からも見て取れるように、エドワードは店長が困っている人を放っておけない性質たてであるとはかり思っていた。だがディランが言うように、店長にはエドワードを助け、店に迎え入れるだけの理由があつたらしい。エドワードがその理由を問えば、

「エドワードが初めて俺を見かけたのは病院だったし、今日も知り合いの医者せんせいに捉まったのは、なぜだかわかる？」

と、店長からは反対に問い掛けが返ってくる。

それに対してエドワードが、わかりません、と首を横に振れば、店長はそのまま肩を竦めた。

「病院に行く理由なんて、限られていると思うんだけどな」

「ではやっぱり、店長は何か病気を？」

もしそうであるなら、「似ている」という言葉に疑問は残るが、少なくとも母を助けてくれた理由としては説明が付く。病を患う者同士放っておけなかったということだろう。しかし、店長はそれを否定した。

「エドワードはどうしても、俺を病気にしたいのかい？ エドワードだって、病気じゃないのに、病院に行くことはあるだろうに。初めて見かけた時もそうだったんだろ？」

「僕が店長を初めて見かけた時？」

エドワードが店長を見かけた日、病院を訪れていたのは、母の薬を受け取るためであつた。その他にも、母の付き添いで訪れたことは数回ある。

「あれは母さんの……」

エドワードは意識せずそれを音にして、「まさか……」と店長を見やった。すると、

「そう。病気を患っていたのは、俺ではなく、母、なんだ」

と店長からは、肯定が返ってくる。

てつきり、店長自身が病院に通っている可能性ばかりを考えていたエドワードにとって、その答えは予測していなかったものである。だが、答えを聞いてしまえば、全ての言葉に納得がいく。同じく病の母を持つ者として、店長はエドワードに自身の姿を重ねたのだろう。だからこそ、「似ている」という言葉がしっくりくるし、店長がエドワードを助けた理由としても申し分ない。

「では、店長のお母様があの病院に？」

しかし、確認のためのその問いに、店長は悲しそうに目を伏せて、首を横に振った。

「母は、もういない」

その言葉の意味するところを考えて、エドワードはさつと青褪めた。その言葉は、『病院にはもういない』というようにも受け取れるが、それ以上に悲しい可能性を思い起こさせる。店長の様子から言って、エドワードが思い描いたその可能性はきつと間違っていない。

それは、妖精この尻尾こに来て、一度として店長の母の姿を見ていないことから、確信に近かった。

だから、「母はもう既にこの世を去ったんだ」と続けられた言葉に、エドワードは、やはりな、と思った。そして次にエドワードの心に思い浮かんだのは、もう既に亡くなっているという店長の母に対する疑問である。

病院に入院していたというけれど、彼女は妖精だったのだろうか。エドワードは自問した。いくらなんでも個性豊かな妖精が、病院のベッドに収まることなどないだろう。通いであつたら捨てきれぬ可能性ではあるが、入院となるとその可能性はずっと低くなる。だとすると、店長の母親は人間なのかもしれない。その結論に行き当たって、エドワードは愕然とした。その息子である店長もまた、その血を受け継いでいることになるからだ。

もしかしたら、ディランがエドワードに見せた表情こそが、エドワードが抱いていた不安と同質であるかもしれない。

そのため、エドワードは遠慮がちに店長に問い掛けた。

「店長のお母様はどういった方だったんですか？」

「優しくて、何もかも包み込むような包容力を持った人だったよ」

店長は、昔を慈しむように目を細めて語った。その声音からは、店長がその肉親をいかに大切にしていたかを窺い知ることができる。エドワード自身が両親やフェリシアのことを語る時のように、その声音が悲しみを通り越して、とても穏やかであったからだ。

「お母様を愛してらしたんですね」

「ああ、俺は母が大好きだったよ。母は、人と妖精問わず、誰からも愛される人だったんだ。ここにいるディランも含めてね」

「ディランさんも、ですか？」

エドワードと店長のやりとりを黙って見守っていたディランは、そこでもうやく口を開いた。

「そう、俺も大好きだったぜ。あの人の息子に生まれたかっと思っくらいにはな。幼いながらに、兄貴のことが羨ましくてならなかったんだぜ。だからせめて、あの人の下で働くのが夢だったんだ」

「ディランは、あの頃からこの店を手伝っていたくらいだからなあ」

「あの頃？」

「母がこの店を始めた頃さ」

「じゃあ、この店は……」

「うん、母が当時の妖精王に許しを得て始めたものなんだ。その意味が、エドワードにはわかるだろう？」

この店は、店長にとって形見も同然なのだ。店長の言葉に、エドワードはそう思った。だが同時に、自身が家族を失うことを想像して、思い出の詰まった店で過ごすことはひどく辛いことのように思えた。

「辛くはないんですか？」

エドワードはその思いを口にして、店長を真っ直ぐに見つめた。

店長は、その言葉に驚いたように瞬きを返して、

「母は人であっただけれど、妖精の友であっただ。だから母は、時

代の変化と共に、人が妖精を信じなくなってしまったことを嘆いていた。人が妖精の友で在り続けることを望んでいたんだ。その意志を継ぐことが、俺の役目だよ」

と言う。それから店長は、ディランとエドワードに順に視線をやり、言葉を続けた。

「だから、大丈夫。絶対に潰させやしないよ」

大丈夫——その言葉はエドワードにとって、何よりも心強いものであった。

六話 店長【4】（後書き）

次回、七話は「友」を予定しています。
いよいよラストです！

七話 友【1】

ディランが知らせを持ってきた日から、何事もなく二ヶ月が過ぎようとしていた。ディランが帰った後は、ルーから知らせを受けたアリーやニーヤの訪れで店は騒がしかったが、二ヶ月も過ぎればあの騒ぎが嘘のように思えてしまう。それでも、いつも通りに見えて、その実店長が気をはっているのは確かだった。朝はエドワードがやってくる以前にもう店に出ているし、地下の倉庫に降りる時間も最小限なのだ。

それはきつとエドワードを店に一人にしないための気遣いなのだろう。

エドワードはその気遣いが喜ばしかったし、不謹慎だと思いながらも、店長や客達と共に居る時間が増えることをとても嬉しく思う自分がいることに気が付いた。その感情に促されるように、エドワードはこのまま何も起こらないのではないかという淡い期待さえ抱き始めていたのだ。

だが、その日々は一人の来訪者によって、終わりを迎えることになる。

その来訪者がやってきたのは、冷たい風に混じって春の陽気が漂い始めた冬の終わりのことだった。

ちょうどカウンターで本を読んでいたエドワードが、いつものベルの音に顔を上げると、ドアの隙間から陽の香りが漂ってくる。続いて目に入ったのは、蜂蜜色の柔らかな髪と新芽の緑を瞳に宿した青年の姿だった。彼は天気が良いこともありコートは羽織っていないが、首元までしっかりとシャツのボタンを止め、紺のベストにジャケットという出で立ちをしていた。年齢は店長より少し年下だろうが、いつもだらしのない店長とは正反対で、服装からは誠実さが滲み出ている。好感が持てる相手のようだ、とエドワードは思った。だがその印象に反して、彼はドアに手を掛けたままカウンター

のエドワードの姿を捉えると、その整った眉を寄せ、

「兄さん^{にい}、どういうことですか」

と不機嫌そうに言葉を発した。

その言葉に、エドワードの横から聞こえていた音がぴたりと止まる。隣では店長が、エドワード同様椅子に座って新聞を読んでいたはずだった。エドワードが遅れてそちらに目を向ければ、店長は手にした新聞をカウンターに置いて、相手を真正面から見すえている。店長のいるカウンターと来訪者の居る店の入り口とは数メートルの距離があるが、二人の間に流れる空気は、今までの来訪者達のそのどれとも違っていた。その様子からいっても、二人の間に何かあるのは明らかだろう。

彼が件の妖精王^{くだん}なのだろうか。

エドワードがそう思い至るのに時間は掛からなかった。彼の服装は品の良いものであったし、何よりエドワードの姿を捉えた時の表情が好ましいものではなかったからだ。

だが、それでもそれを断定するには、彼の先程の発言が邪魔をする。

彼は店長のことを「兄さん」と呼んだ。

そこで、エドワードが思い起こすのはディランの姿である。ディランも店長のことを「兄貴」と呼んではいたが、目の前の来訪者が呼ぶその響きは、ディランのそれとはどこか違っていた。ディランの呼ぶ「兄貴」が信頼を表すものなら、彼が呼ぶ「兄さん」は親愛を表すものだ。

さらに、エドワードは二ヶ月前、店長を追って来た子供のことを思い出して考える。あの子供は家族のことを慕っていながら、憎まれ口をたたいていた。青年の発した第一声は、決して好ましい雰囲気ではなかったが、あの時の子供のように、気を許した相手故の批難なのだろう。

だが店を潰すかもしれない妖精王が、店長にそんな感情を抱くだろっか。

そんなはずがない、という思いがエドワードのどこかにあった。
「妖精王は店長のことを認めている」というルーの発言があったとしても、その考えは変わらない。

けれど、彼が妖精王だと仮定して先程の発言を信じるなら、彼は店長の家族ということになる。いや、そもそも店長の母親が人間であるのなら、店長の弟もまたその人間の血が流れていることになるのだ。そんな人物が妖精王であることなどあり得るだろうか。

考え出したらきりがないとわかっていながらも、エドワードは彼が口にした「兄さん」という言葉が気掛かりでならなかった。

七話 友【2】

そんなエドワードの困惑など知らず、青年は言葉を発しない店長に痺れを切らしたようだった。青年は、

「なぜ黙っているのですか！」

と声を張り上げた。

彼の心に呼応するように、彼が支えるドアの合間から冬の名残のある強い風が吹き込んでくる。その風にあおられて、カウンター上の新聞がバタバタと音をたてた。その音の中でエドワードは、目を細め身を震わせた。先程嗅いだ陽の香りとは違い、冷たい風は流石に堪える。

それに耐えかねて、エドワードは青年にドアを閉めるように促そうとした。だがエドワードが口を開くより早く、風の巻き起こす音に負けないよく通る声が響く。

いつもの気の抜けた声とは別の、凜とした強い意志を持った声――それは紛れもない店長の声だった。

「俺には、なぜ君が怒っているのかがわからないよ、アルフレッド」
アルフレッドと呼ばれた青年は、その声にドアを支える手を離れた。鈴の音と重たい金属がぶつかる音がしたかと思うと、風の巻き起こす音が消える。後に残されたのは、ぐしゃぐしゃになった新聞紙と再び互いを見すえた兄弟だった。

「わかっていてそれを仰いますか、兄さん」

「君の考えがどうあれ、俺の考えは変わらないよ」

それでも、と口にして、アルフレッドはエドワードにちらりと一瞥した。

「私は、あなたがここに居ることを許せないのです」

「そうだろうね。先程から君の目を見ていればわかる。でも、俺はここに居ることを望んでいるんだ」

「なぜですか。あなたが己の力で支払うと決めたあの人の入院費も、

もうすぐ払い終ると聞きます。そうすると、兄さんが妖精の尻尾に残る必要性はなくなります。その後もこの店を続けると？ いいえ、あなたは私たちと暮らすべきだ。だから私はあなたを連れ戻しに来たんです」

ただ黙って二人の遣り取りを聞いていたエドワードは、青年が店長に向けた言葉に、かっと頭に血が上るのを感じた。彼の言い分は、店長の気持ちをちっとも尊重していない。エドワードは感情に促されるまま、

「待つてください」

と、会話に割って入った。

「どういう事情かは知りませんが、それを決めるのはあなたではないはずです。あなたも弟なら店長の気持ちがわかるはずでしょ」

入院費というのは、店長の母親のもので、店長が定期的に病院に出掛けていたのは、毎月少しずつその付けの支払いをするためだったのだろう。店長は母親が残した入院費という借金を返しながら、この店を守ってきたのだ。いくら弟だとしても、店長が自分の意思でここにいる以上、店長を母親の形見であるこの店から引き離してよいはずがない。

弟だというなら、そんな店長の思いも亡くなった母の思いも理解しているはずだ。それを、入院費の返済が終わる今更やって来ておいて、とやかく言う筋合いはない。

けれどエドワードの予想に反して、青年は不機嫌そうに眉間の皺を深くした。それとは逆に店長の表情は緩む。店長はあまつさえ、あはははと声をあげて笑い出した。その笑い声にエドワードは思わず目を丸くする。

「笑わないでくださいよ」

エドワードが恨めしそうに店長を見やれば、

「ごめん、ごめん。なんだか嬉しくなっちゃってね」

と店長は謝罪を口にして、呼吸を整えた。それから、不機嫌そうにその遣り取りを睨みつけていた弟に目を向ける。

「アルフレッド、そういうことだよ。君には、俺の行動を決める権利はない」

「……私が、血の繋がらない弟だからですか？」

血の繋がらない弟——青年が発したその言葉に、エドワードは息を呑む。言われてみれば、蜂蜜色とプラチナブロンド、緑色と堇色が確かに彼ら二人の容姿は異なっている。それに、二人に血の繋がりがなければ、彼が店長の気持ちに対して反発的だったことにも説明がつくだろう。けれど、彼らが互いを兄弟と呼ぶ理由はわからない。エドワードが店長の様子を窺えば、店長は悲しそうに目を細めた。「それを気にしていたのかい。俺は母の友人であつた君の父が俺を養子に迎えてくれた時からずっと、養父とうさんに感謝しているし、君を本当の弟のように思ってる」

「だけど、あなたは人間と共にあることを選ぶと仰つたではないですか」

母が亡くなった後、店長は養子となつた。その会話からエドワードは、二人の関係性を感じとつた。青年は養子に入つた先の家の子供なのだ。だから二人に血の繋がりは無い。

そして青年の言葉から、店長が養子に入つた先が妖精の一族であることも理解できる。妖精である青年が人間を好いていないことも明らかだつた。

なのに、店長は、

「アルフレッドは人間が嫌いかい？」

と、いつぞやエドワードがデイルンに投げかけたのと同じ質問を口にした。案の定青年は、首を縦に振つた。

「はい。だって、貴方の母はその努力を報われることなく命を落とした。人は残酷です。私たちの存在など顧みなくなつてしまった。あなたはそれでも人の味方にいるのですか？」

彼の返答は店長も予想していたのだらう。店長は、「それも一つの真実だ」と肯定を示し、「でもね」と言葉を続けた。

「俺は、人が皆そつだとは思わないよ」

七話 友【3】

力強く言い切った店長の言葉に、青年が更に反発を覚えたのはエドワードから見ても明白だった。

「何を根拠にそんなことが言えるのですか」

「では逆に聞くけど、アルフレッドこそ、どうして人が皆そうだと決めつけられるんだい」

青年は、その問い掛けに唇を噛んだ。

「アルフレッドは俺に根拠を聞いたね。俺は長く人間と共にあった。それが根拠にはならないかい」

「しかし、その間に兄さんが辛い目にあっていることも私は知っています」

「だけど、それを上回るくらい嬉しい出会いもあった。ここにいるエドワードとの出会いだってそうだ。エドワードは君の言う人間達とは違う」

二人の視線が一樣にエドワードへ向いた。特にエドワードを見る青年の表情は、エドワードを恐怖させるほどのものだった。エドワードはどんな表情を浮かべてよいのかわからなかった。二人の視線に耐えかねて、思わず顔を俯けてしまふ。けれど、そんなエドワードを励ますように店長は尚も言葉を続けた。

「君が知っているデイルンやアリーも、そして気難しいルーやニヤさえも、エドワードのことを認めているよ」

その言葉にエドワードは恐怖を忘れて、驚きに顔を上げる。店長からだけでなく、この店を訪れた妖精達からも認められている。それはエドワードを奮い立たせるには十分な事実だった。

エドワードは自身を上げますように一度拳を握り締めた後、店長の手を取った。店長は驚いたようだったが、エドワードと目が合うと、口角を少し上げただけで何も言わなかった。そのまま店長の手を引いてカウンターを出ると、エドワードはドアの前に立つ青年へと歩

み寄った。

離れていては、伝わるものも伝わらない。それがエドワードにできる最良の選択だった。

そして、自分を見下ろす青年を前にしてエドワードは、

「僕は……」

と、勇気を振り絞って口を開く。口に出さずにいた気持ちを言葉にすることは難しい。それでもエドワードは懸命に言葉を探した。

「ルーさんもアリーさんも、ニーヤさんもロージも、皆に出会えてよかったと思います。彼らに出会う機会を与えてくれたこの店で働けたことを嬉しく思っんです。そして、店長には心から感謝しています」

「だから私にも、兄さんが人間の世で店を続けることを認めると？」
先程よりも距離が縮まった分、青年の威圧感は増している。けれどエドワードはもう怖いとは感じなかった。自分の抱く感情は間違っていない。店長の手を通じて感じるぬくもりがそれを証明してくれている。

「僕は店長にも、ルーさん達にも、この店に居て欲しい。それでは駄目ですか」

エドワードは言いながら、店長の手をぎゅっと握った。それに応えるように店長も手を握り返してくれる。

「アルフレッド、俺は君に考えて欲しい。わかり合う努力もせずに決めつけることが、本当に正しいことなのかを」

青年は目を瞬かせた後、店内を見渡し、エドワード、店長と順に目を向けた。再び青年が店長と目を合わせた時、その瞳の中で整理しきれない感情が揺れているのがエドワードには見てとれた。

「……兄さんは、昔、あの人がくれた名に恥じないように生きたいと言っていましたね。それは今でも変わりませんか？」

「ああ、俺は母が与えてくれたアルヴィン——妖精の友を表すその名において、妖精の友で在り続けたいと思う」

「では、人間と共にこの店を続ける。それがその答えというわけで

すか」

「俺はね、アルフレッド、妖精の友として、妖精の友が俺一人だなんて悲しすぎると思うんだ」

優しく諭すように呟かれたその言葉に、エドワードは思った。

店長が自分と似ていると称する以上に、店長の義弟おとうことこの店で働く以前の自分は似ているのではないだろうか。

両親や使用人といった限られた人々に囲まれて生きていた頃のエドワードは、狭い世界のことしか知らなかった。そして同じように狭い世界に生きる妖精の彼は、人間に兄を取られてしまうことを酷く恐れている。

そう思い至ると、エドワードの口を自然と言葉が通り抜けていた。「友達になりましょう」

エドワードが発した言葉に、青年は目を大きく見開いた。

七話 友【4】

それを見てとって、エドワードは畳みかけるように再度言葉を繰り返す。

「僕はあなたと仲良くなりたいです」

「……本気で言っているのか」

一拍置いて、青年は言葉を縛り出した。

エドワードは真っ直ぐにそんな彼を見つめた。

「嘘を言う必要なんてないでしょう？」

一種の睨みあいに近い形で互いに微動しなかったが、先に目を逸らしたのは青年の方だった。さつと逸らされた視線は、エドワードの右隣に立った店長へと向く。エドワードはそれを目で追い、隣に立つ店長を見た。店長はエドワードと繋いでいた手を離し、腕組みをして青年に苦笑を返す。

「少しは俺の言った言葉の意味がわかっただろ」

青年の瞳の中に、先程までとは違う感情の色が浮かんだのを、エドワードは確かに目にした。

「口ではなんとでも言えます」

「ああ。でも、君は拒まない」

「私はそんなに甘くない」

「いんや、君も本当は理解しているよ。だって、俺を受け入れてくれた」

「違う。それは兄さんが……」

「俺が？」

首を傾げる店長に、青年は顔を俯けた。

「俺が妖精王の友であった母さんの子だから、それとも養父（いんやうふ）に家族に迎え入れられたから？ そうじゃないだろ。それでも、この身に流れる人間の血にも関わらず俺を兄だと認めてくれたのはアルフレツド自身だ」

青年は肩を震わせた。

店長の言葉には義弟おとうとに対する信頼がにじみ出ている。そんな店長が信頼を寄せる相手と、エドワードはますます仲良くなりたいと思った。

エドワードは一步前に出て、俯いたままの青年の前に立つと、彼の名を呼んだ。

「ア、アルフレッドさん……」

蜂蜜色の前髪の間から緑色の瞳がエドワードへと向く。エドワードは、その視界に入る位置に右手を差し出した。その意味がわからず目を瞬かせた相手に、エドワードは不安げに呟く。

「握手です。だめですか？」

青年はゆっくりと顔を上げ、その手をまじまじと見た。

「お前は何度季節が廻ろうとも、私達の存在を忘れたりはいらないか」「忘れられるはずありません。僕にとって、もう既に大切な人達ですから」

「そうか……」

はつきりと言いきったエドワードの言葉に、青年はおずおずと己の手をエドワードの手と重ねた。手を通して伝わる熱が確かに妖精かれの存在を示している。エドワードがぎゅっとその手を握れば、視線の先で合わせられなかった目が微笑んでいるように見えた。先程までの威圧感とは違い、その頬笑みは雪解けのようだ、とエドワードは思った。きっと彼はとても優しい人なのだ。そうエドワードに思わせるには十分だった。

「兄さん、私はしばらく彼の言葉を信じてみようと思います」

「うん」

交わされた兄弟の会話は短いものだったが、それで十分だった。互いに頷き合い、青年は踵を返す。

「もう帰ってしまうんですか」

ドアノブに手を掛けた青年にエドワードが言葉を投げかければ、青年は蜂蜜色の髪を揺らし振り返った。

「また会おう友よ」

言葉を音にして、青年はベルの音と共に通りにさす光の中へと身を投じた。ドアの合間から漂う陽の香りを残し、その後ろ姿は遠ざかっていく。エドワードは、それをいつまでも見送っていたが、やがて彼の後姿は光に溶けるように消えてしまった。

「行ってしまいましたね」

それに名残惜しさを感じてエドワードは呟きをもらす。すると、同じように彼を見送った店長は、安心したように大きな伸びをした。だが次に口にされた言葉にエドワードは思わずぎよっとする。

「うん、でも言葉通り、またすぐにやってくると思うよ」

「まさか、約束が守られているか監視しに、なんて言わないですよね」

エドワードが問えば、店長は首を横に振った。

「友に会いに来るのに理由はいらないだろ。彼は命芽吹く春を司る存在だからね。本格的に春を迎えればまた会うことになると思う」

そこでふとエドワードはルーの言葉を思い出した。妖精王は命を司る存在——とルーは言っていたではないか。エドワードのなかで、店長の言葉とルーの言葉が重なる。

「では、やはり彼が——」

「そう、彼が新しい妖精王。生命の誕生の時を守る春の精なのさ」
思わず身体力が抜け、エドワードは床にへたり込んだ。

予想していなかったわけではない。それでも、今になってようやく自分が妖精王と対峙していたことを実感して気が抜けたのだ。

エドワードが約束を守っていく限り、彼は友でいてくれるのだろう。これで店の危機は去ったのだ。

自分はこの店を守る力になれた。そう思った瞬間、エドワードは思わず表情が緩むのを感じた。

そんなエドワードの様子を見て取って、店長が笑い声を上げる。それに釣られて、エドワードも笑い出せば、妖精の友二人の笑い声が、店の中に木霊した。

終話 妖精の尻尾

朝露が石畳をしつとりと濡らしている。その日エドワードはちょっとだけ早起きをして家を出た。朝焼けに染まる空を見上げれば、家々の煙突から上がった白い煙が空へと溶けていく。あの煙は朝食の準備をしているのだろうか。家々の窓からは、顔を出し朝の空気を吸う者や忙しく身支度を整える姿も見受けられる。

エドワードがそんな光景を目にするのも、もう数えきれないほどになる。乗合馬車に揺られ大聖堂の近くまでやって来た頃には、通勤客でもう既に人の流れができていた。その合間を擦り抜けてエドワードは、いつもの小さな路地を抜ける。

すると、開けた視界と共にレンガ造りの建物に浮かぶ朱色の扉が見えた。その扉に吊るされたプレートが朝の光を浴びて光る。

眩しさに目を細めながらエドワードが近付けば、そのプレートはまだ裏返しになっていた。

少し早く来すぎただろうか。ふとエドワードは思ったが、今日も彼らに会えるかと思うと気持ちは弾んでいる。

エドワードは温かな春の朝の香りに深呼吸して、店のプレートをそっと表に向けた。

妖精の尻尾（完）

終話 妖精の尻尾（後書き）

昨年の十月から始めた連載も、無事終わりを迎えることができました。

まずは何より、最後までお付き合い下さいました皆様に感謝を。

ありがとうございます。厚かましいとは思いつつも、何か一言残していたけると嬉しいです。

さて、完結とは言いましたが、実はこっそり番外編の掲載も考えております。私生活が数ヵ月後から忙しくなるので、今のところ予定は未定なのですが……。本編時間軸外、過去のお話で、店長やエドワードではなく登場したサブキャラクター達に関するものになると思います。

とりあえず今考えているのは「魔人と王」「夜のお茶会」といったタイトルですね。お時間がございましたら、そちらもお付き合いいただけると幸いです。

案内人

それはエドワードが妖精の尻尾に出入りし始めて一年が経とうとする、秋の終りのことだった。

その日エドワードが店に着くと、店の札は昼間だというのに裏に向けられたままであった。

今日はお休みだと言付かっていたから、店長は店にいないだろうか。エドワードは手にしたバスケットに視線を落とす。そこからは先程から甘い香りが漂っている。甘い物好きの店長達ならきつと喜ぶ代物であろうが、そもそもエドワードが休みに店を訪れた原因はこれだった。

今朝のことを思い出してエドワードは深く溜め息をつく。

朝目を覚ますと、エドワードはいつものようにベッドの脇に置かれたガラス製の水差しからコップに水を注ぎ、喉を潤し起き上がった。ちょうどそれを見計らったようにドアをノックする音が響いて、どうぞ、と入室を促せば、

「おはようございます、エドワード様」

と家令の声と共にドアが開く。いつものようにきつちりと黒い服に身を包んだ家令が、洗面器とタオルを手に部屋の中に入って来た。そこまではいつも通りと言えたのだ。だがその拍子に空いたドアの隙間から漂ってきたのは甘い香りである。その香りの正体を計りかねていると、彼はベッド横のテーブルの上にお湯の入った洗面器を置きながら苦笑を浮かべた。

「奥様が朝から張り切っておいでなのですよ」

「母さんが？」

「ええ、午後からはフェリシア様もいらっしゃいますし、アフタヌーンティー用のお菓子を、今日は自ら腕を振るうのだと台所にお立ちです」

この時、張り切り過ぎて体調を崩さなければよいが、とエドワードは母のことを思い溜め息をついたのは仕方がないことだ。

そして、家令の言葉を目の当たりにしたのは身支度を整えて食堂で朝食をとっている時だった。甘い香りを漂わせて母が姿を現したのだ。その香りの正体は母の手に行っているバスケットだと、エドワードはすぐに察しがついた。

そして母は言った。

これをいつもお世話になっっている店長さんに渡して欲しい、と。フェリシアの分に合わせて店長の分も用意したらしいそれは、母お手製のクッキーだった。それに今はマフィンも焼いているのだという。バスケットの中味に加えてそれも届けて欲しいというのだ。結局、母の頼みを断り切れず、店長が店にいる確信もないままにここまでやって来てしまったのである。

「店長、店にいますか？」

「誰が店にいますか？」

独り言に返ってくる言葉があるとは思わずに、エドワードは慌てて振り返った。

ステップに足を掛け、そこに立っていたのは丸顔に口が裂けたような笑みを浮かべた男だった。丸い顔に反して、身体はひどく痩せている。エドワードはまるで案山子のようなのだと思った。そして彼の着ている服は、労働者が着るようなシャツとパンツでどこどころ煤に汚れている。その上デザインもどこも古い物のようだ。今までこの店で出会った客達の身なりはよかったが、この男に限ってはそれには当てはまらないらしい。

「あのお客様ですか？」

エドワードが考えあぐねて尋ねると、男はそれを否定した。

「いんや、今夜の打ち合わせをしないアヴィーに会いに来たのさ」

「今夜？」

「そうさ、今夜はおいらにとっては、年に一度の稼ぎ時だからな」

エドワードには男の言っていることはよくわからなかった。そのエドワードの表情を察したのだろう、男が怪訝そうに眉を寄せる。「坊主、今日が何の日か知らないのか？」

しばしの沈黙の後、エドワードが首を横に振ると、男はちえっと舌打ちをした。

「つまんねえな。お前もこの店の店員なら精霊やらに関わることは知っておいて損はねえぞ」

そう言つて男はエドワードの横をすり抜ける。その一瞬のうちに男の手にはエドワードが持ってきたマフィンが握られていた。エドワードが瞬きをするうちに、男はそれにかぶりつき、店の中へと消える。

店のドアが開いていたことに驚きつつ、エドワードは我に返ると慌ててその後を追った。

店長はエドワードの不安を余所に、留守ではなかったようだ。ベルの音を聞いてか二階から姿を現すと、入って来た男とエドワードを順に見た。

「ウィルはともかく、エドワードはお休みなのはどうしたんだい？」

「あのすみません。出掛けに母から預かり物をしたので。これよかつたら召し上がってください」

エドワードは手にしたバスケットを店長に手渡した。店長はその中から漂ってくる香りに、鼻を動かした後、その中味を確認して目を輝かせる。

「おいしそうだね。お母様にありがとうと伝えておいてくれるかい。それからウィル」

店長はバスケットから顔を上げ、マフィンを頼張る男を睨んだ。

「君は手癖が悪すぎる。いい加減行儀よくしたらどうだい？」

「余計なお世話だよ。それにこれでも、少しは丸くなったって言われてるんだぜ」

「顔もね」

皮肉を込めて店長が言うと、口に物が入っていることも忘れて男

が怒鳴る。

「うるせえよ！」

確かに店長の言葉通り、行儀はよくない。エドワードと店長は揃って眉をひそめたが、男は気にせず商談用のテーブルの上に腰を下した。

「ウィル、はしたないぞ」

「おいらが何をしようが、おいらの勝手だろ」

「そんなこと言っていると、新しい身体を準備してあげないよ？」

「ううっ……」

言葉を失った男は、渋々テーブルから下りた。

だが雲行きはどうにも怪しい。身体ということは、やはり人間のそれを指しているのだろうか。エドワードは嫌な予感に身震いをした。

「店長、身体っていったい……？」

恐る恐る尋ねたエドワードに店長は苦笑を浮かべる。

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ。彼の身体というのはカブのことだから」

「カブ？」

「おいつ、それは言わない約束だろうが！」

カブというところの白くて丸い野菜のことだろうか。いわれてみれば彼の丸顔はカブに見えなくもない。それに彼の慌てようから全くのでまかせでもないようだ。

しかしそこで疑問になってくるのは、なぜ男の身体がカブであるかということである。

エドワードが考えを巡らせる横で、店長と男の口論は続く。

「そんな約束した覚えはないし、それに君の話は結構有名だろ？」

「不名誉極まりないんだよ！ それにそいつは知らないらしいぜ」

「ああ、エドワードはアイルランド生まれでもカトリック教徒でもないみたいだから、君のことも今日のことも知らないんだろうね」

「だからそらない奴にわざわざ言う必要はないだろ」

「でも彼はこの店の店員だよ。だから知っておいて損はない」

奇しくも先程自らが口にした言葉を店長に返されて、男は押し黙った。そんな男を放置して店長はエドワードに向き直る。

「昔、生前の行いから死後の世界への立ち入りを拒否された男がいたんだ。彼は悪魔にもらった石炭をカブをくりぬいた提灯の中に入れ、それを手に今も安住の地を求めて彷徨い続けているんだよ」

「それがこの人だと？」

「そう、彼の名はウィリアム。身体のない彼にとってカブの提灯は、こうして仕事をする時の身体代わりでもあるのさ」

「でもどうしてそんな人がこの店に？」

エドワードは男の姿を捉え、目を瞬かせた。店長の話が事実だとするとこの男は幽霊ということになる。それに話を聞く限り彼が善人でないことは確かだ。そんな男を店に入れてよいのだろうか。

「今日は諸聖人の日の前夜祭だからね」

「諸聖人の日？」

「ふんつ、まったくもって何も知らないんだな」

呆れたように男は鼻で笑った。

それをたしなめて、店長は苦笑を浮かべる。

「ケルトの言い伝えではね、10月31日は精霊や死者の魂が出歩く日なんだ。事実毎年精霊達はお祭り騒ぎさ。だから今晚は大規模なパーティーをするんだ。彼の明かりはその客達の案内役に最適なんだよ」

店長がそう言うのなら仕方がない。エドワードは男についてそれ以上何も言わないことにした。代わりにエドワードが思ったのは自分の大切な友人達のことである。

「その集まりには皆さんも来るのでしょうか？」

ルーとアリーの夫婦やニーヤにはよく会うが、ロージーやアルフレッドにはこここのところ会えていない。

その問いの真意を察して店長は微笑んだ。

「なんならエドワードも来るかい？」

その提案は酷く魅力的なものであったが、エドワードはフェリシアのことを思い、首を横に振った。

「すみません、今晚は大事な人が来るんです」

「それなら仕方がないね。お母様のお菓子は今晚皆で頂くことにするよ。エドワードにとって今晚が楽しい一時になるといいね」

「ええ、店長も楽しい一時を」

——Happy Halloween!——

案内人（後書き）

もうすぐハロウィンということで番外編をお送りしました。

19世紀にアイルランド人達がアメリカに移住して、現在のハロウィンの文化が形作られていきました。

そして今の形のハロウィンが定着したのは20世紀に入った頃のことです。

なので時代設定的には現在のハロウィンには触れていないですが、ウィルはジャック・オ・ランタンのモデルになっている伝承から引っ張ってきました。興味があつたら調べてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2187o/>

妖精の尻尾

2011年10月23日21時30分発行